

平成 29 年度 陵墓関係調査報告

陵 墓 調 査 室

調査の概要

書陵部陵墓課陵墓調査室においては、陵墓における保全・整備のための土木工事などを実施するに際し、「周知の遺跡」、さらには文献等に記載があることにより、遺跡の可能性がある場合、その施工の区域・箇所における遺構・遺物の有無を確認し、工法の決定に資するため、所定の手続きをふまえつつ、事前調査・立会調査等を毎年実施している。

平成 29 年度においても、所轄の陵墓監区事務所や京都事務所などの関係機関、さらには地元の教育委員会とも協力し、以下の区域・箇所において調査をおこなった。その概要を以下に記すこととする。

[立会調査] 14 件

1 淳和天皇大原野西嶺上陵（京都市西京区大原野南春日町）石柵その他修繕工事に伴う調査

桃山監区 7 月実施、担当：北條朝彦・高比良裕喜

石柵の修繕工事に伴う石積積直し工事のため、その基礎部分を掘削した。掘削箇所では過去の整備工事に伴う盛土層が確認されたが、遺構・遺物は確認されなかった。

2 光明天皇大光明寺陵以下二陵一墓（京都市伏見区桃山町泰長老）防災整備工事に伴う調査

桃山監区 12 月実施、担当：平尾伸也・平松大典

防災整備工事に伴う植栽工事のため、深さ 20cm 程度を掘削した。掘削箇所では腐植土と過去の盛土が確認されたが、遺構・遺物は確認されなかった。

3 天智天皇山科陵（京都市山科区御陵上御廟野町）水路その他整備工事に伴う調査

月輪監区 4 月～5 月実施、担当：横田真吾・長濱匡洋・森岡正則

昨年度の工事が 5 月まで延長になったため、立会調査を実施した。昨年度の報告時の所見と変更はなく、遺構・遺物は確認されなかった。

4 地蔵谷聖護院宮墓地（京都市左京区北白川地蔵谷町）侵入防止柵取設工事に伴う調査

月輪監区 5 月～8 月実施、担当：西村悦二・松村一成

侵入防止柵取設工事に伴い、その基礎部分を掘削した。掘削箇所は表土と地山のみが確認され、遺構・遺物は確認されなかった。

5 花園天皇十樂院上陵（京都市東山区粟田口三条坊町）防竹シート敷設工事に伴う調査

月輪監区 3 月実施、担当：長濱匡洋・清水謙太

当該工事に伴い、深さ 50cm 程度を掘削した。掘削した箇所の土層は、表土と整地土であり、遺構・遺物は確認されなかった。

6 成務天皇狭城盾列池後陵（奈良市山陵町）駐車場車止柵改修工事に伴う調査

畠傍監区 7 月実施、担当：松岡隆行・志賀陽太

当該工事に伴い、深さ 70～100cm 程度を掘削した。掘削した箇所の土層は、表土と近年の整地土であり、遺構・遺物は確認されなかった。

- 7 垂仁天皇后日葉酢姫命狭木之寺間陵（奈良市山陵町）佐紀部事務所他整備工事に伴う立会調査
畠傍監区 12月～3月実施、担当：有馬伸・松岡隆行・志賀陽太・坂部泰生
報告文は後掲する。
- 8 日本武尊白鳥陵（畠傍）（御所市大字富田）正門その他改修工事に伴う立会調査
畠傍監区 1月～2月実施、担当：池西良和・向井謙太
当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが、念のため立会調査を実施した。掘削箇所は、既存の整備工事に伴う埋め戻し土にとどまっており、遺構・遺物は確認されなかった。
- 9 仁徳天皇后磐之媛命平城坂上陵（奈良市佐紀町）参道入口石柱修繕他工事に伴う立会調査
畠傍監区 3月実施、担当：松岡隆行・志賀陽太
当該工事に伴い、深さ 20cm 程度を掘削した。掘削した箇所の土層は、表土と整地土であり、遺構・遺物は確認されなかった
- 10 五十瓊敷入彦命宇度墓（泉南郡岬町淡輪）外堤護岸その他整備工事に伴う立会調査
古市監区 11月～2月実施、担当：横田真吾・近藤時男・安岡徹悦・須藤周太・濱田武典
報告文は後掲する。
- 11 応神天皇恵我藻伏崗陵（羽曳野市誉田）拝所石柵修繕工事に伴う調査
古市監区 11月～1月実施、担当：北田雄三・小寺翔人
当該工事に伴う掘削は、既存拝所整備工事における盛土内にとどまっており、遺構・遺物は確認されなかった。
- 12 日本武尊白鳥陵（古市）（羽曳野市輕里）転落防止柵取設工事に伴う調査
古市監区 12月～1月実施、担当：北田雄三・小寺翔人
当該工事に伴う掘削は、既存参道整備工事における盛土内にとどまっており、遺構・遺物は確認されなかった。
- 13 後村上天皇檜尾陵（河内長野市寺元觀心寺内）堆積土撤去その他工事に伴う調査
古市監区 1月～2月実施、担当：近藤時男・須藤周太
当該工事は崩落した堆積土を撤去するものであり、新規の掘削はなかったため、遺構・遺物は確認されなかった。
- 14 仲哀天皇恵我長野西陵（藤井寺市藤井寺）近隣水路改修工事に伴う立会調査
古市監区 3月実施、担当：安岡徹悦
本工事は当庁発注工事ではないが、隣接地であり念のため立会調査を実施した。掘削箇所は、既存参道整備工事における盛土であり、遺構・遺物は確認されなかった。
- [墳丘外形調査] 1件
- 15 阿保親王墓（芦屋市翠ヶ丘町）
桃山監区 2月実施、担当：加藤一郎・土屋隆史・舛吉悠也・三井朋宏・高比良裕喜・妹尾吉紹
墳丘部分において、現況測量調査（縮尺 1/100、25cm等高線）を実施した。報告文は後掲する。

[墳丘外表面調査等] 2件

- 16 仁徳天皇百舌鳥耳原中陵飛地へ号（丸保山古墳）（堺市堺区北丸保園）埴輪取り上げに伴う立会調査
古市監区 6月実施、担当：土屋隆史
昨年度に実施した墳丘外表面調査において確認した埴輪の取り上げに伴い、立会調査を実施した。報告文は、前号に掲載済み。

17 宇和奈辺陵墓参考地（奈良市法華寺町）

- 畠傍監区 11月実施、担当：清喜裕二・加藤一郎
陵墓保全強化のため、当該陵墓の墳丘外表面調査を実施した。報告文は後掲する。

[予備調査] 1件

- 18 仁徳天皇百舌鳥耳原中陵（堺市堺区大仙町）第1堤における遺構・遺物確認のための予備調査
古市監区 10月実施、担当：加藤一郎・土屋隆史
当該陵墓において、調査計画策定のための基本データを取得するために予備調査を実施した。報告文は後掲する。

[関連資料調査] 4件

陵墓調査室で実施した上記立会調査等に関連する出土品や文献史料に関する調査を、所蔵者の協力を得て実施した。

19 応神天皇恵我藻伏崗陵飛地ほ号（墓山古墳）出土品関連調査

- 6月実施、担当：土屋隆史
応神天皇恵我藻伏崗陵飛地ほ号から出土した埴輪に関する資料との比較研究のため、学校法人浪工学園星翔高等学校（摂津市三島）、茨木市立文化財資料館（茨木市東奈良）、大阪大学考古学研究室（豊中市待兼山町）、京都大学総合博物館（京都市左京区吉田本町）において、各機関所蔵資料の熟覧、写真撮影、実測作業を実施した。調査成果については、前号で報告済み。

20 光明天皇大光明寺陵以下二陵一墓、天智天皇山科陵出土品関連調査

- 6月実施、担当：横田真吾
大光明寺陵、山科陵に関する出土資料と比較研究するために、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課分室と京都市考古資料館が所蔵する資料の熟覧、写真撮影、実測作業を実施した。調査成果については、前号で報告済み。

21 阿保親王墓出土品関連調査

- 2月実施、担当：加藤一郎・土屋隆史
阿保親王墓出土と伝えられる資料について、親王寺（芦屋市打出町）所蔵資料の熟覧、写真撮影、実測作業を実施した。調査成果については、報告文を参照されたい。

22 阿保親王墓、山口県所在陵墓関連調査

- 2月実施、担当：的場匠平
阿保親王墓や山口県所在陵墓に関する文献史料の調査として、山口県文書館が所蔵する「毛利家文庫」の調査を実施した。阿保親王墓に関する調査成果については、報告文を参照されたい。

(徳田誠志)

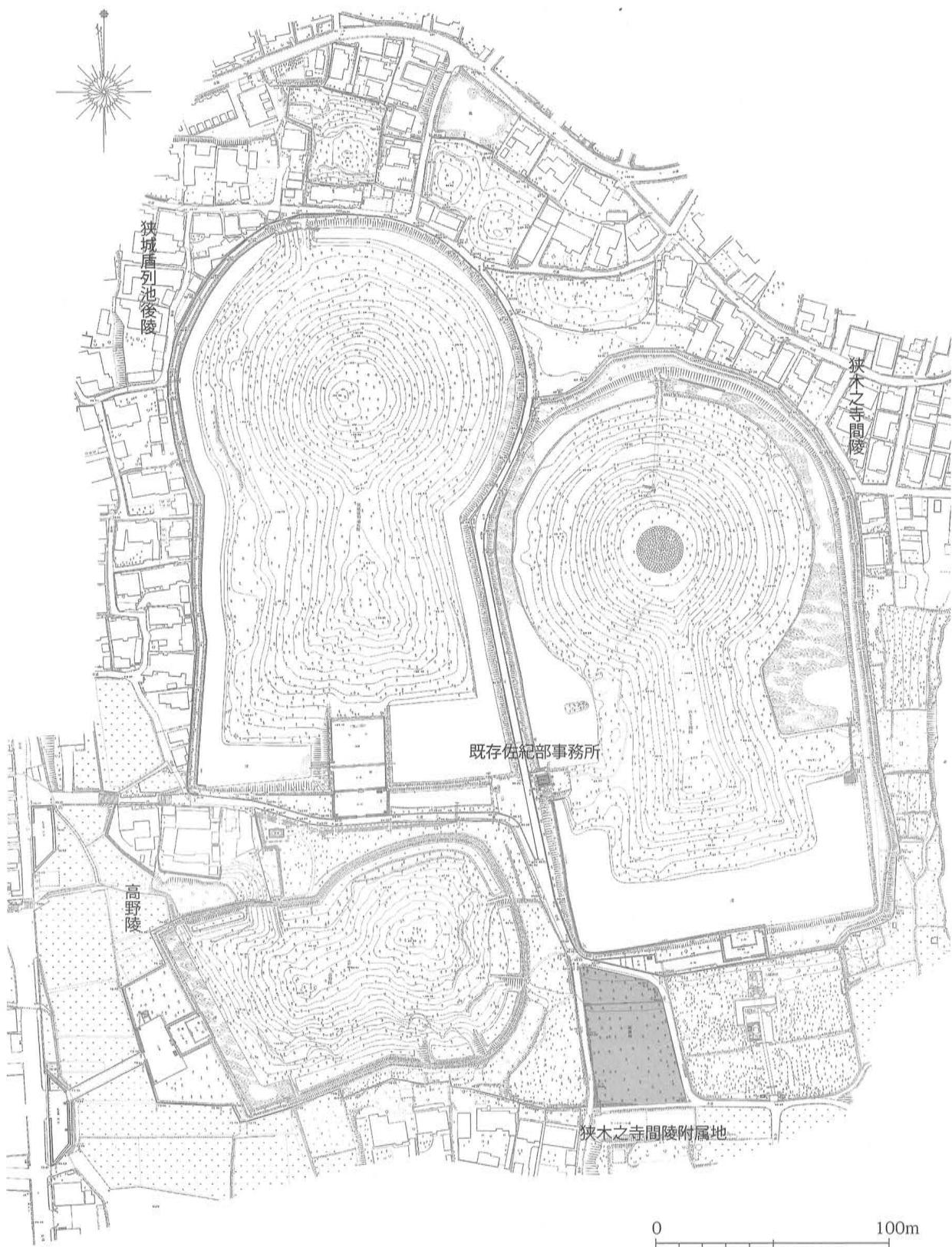
垂仁天皇皇后日葉酢媛命 狹木之寺間陵 佐紀部事務所ほか整備工事に伴う立会調査

関西 4 陵墓監区管下の各部の事務所は、老朽化のため、平成 19 年度以降に順次建て替えつつあり、その機会ごとに調査を実施し、本誌において報告してきたところである⁽¹⁾。既存の部の事務所は、昭和 40 年代から 50 年代にかけて建てられたものであるが、本体の設備は、執務スペースに簡単な流しがあるほかは、外から出入りするトイレしかなく、職員の着替えは仮設のスペースや倉庫内で行っているような状態であった。また、倉庫や車庫を後から建てたケースも多く、そうした場合には離れた場所に置かれることになり、日々の管理業務を遂行していく上で、使い勝手の悪いものであった。こうしたことから、建て替えに際しては、執務環境の改善として、男女別の更衣室やシャワー室、室内から入るトイレなどの生活スペースの追加と、業務の効率化を進めるため、倉庫・車庫も一体化させることが基本方針となっている。このため、事務所本体の規模は既存のものに比してかなり大きくなることとなり⁽²⁾、スペースの関係で従来の場所では建て替えられないケースも生じることとなった。部事務所の建て替えは、これまでに 4 件実施してきたが、このうちの 2 件については場所を移動させている⁽³⁾。

今回の報告対象である畝傍陵墓監区佐紀部の事務所は、「佐紀三陵」とよばれる、成務天皇狭城盾列池後陵、称徳天皇高野陵、垂仁天皇皇后日葉酢媛命狭木之寺間陵が近接して所在する地区のうち、狭木之寺間陵域内に置かれていた。しかし、建物規模拡大によって生じるスペースの問題以前に、その位置が、原初の遺構とされる渡土堤上にあたるため⁽⁴⁾、遺構保存の観点から、建て替えに際して移転させることとなった。移転先の候補地には複数の案が取り沙汰されたが、必要なスペースを確保でき、かつ遺構存在のリスクが低く、さらには景観的な違和感を生じさせない場所として、狭木之寺間陵南側の附属地のうち、最も南側の区画が第一候補となった（第 1・2 図）。当該地は人為的に造作された平坦面となっており、高野陵や狭木之寺間陵に直接関わる遺構が存在する可能性は低いものと推測されたが、小規模の古墳や、平城京に關係する遺構が存在する可能性は考えられたため⁽⁵⁾、平成 26 年度に遺構・遺物の存否を確認するための事前調査を実施した⁽⁶⁾。その結果、遺物の出土はあったものの、明確な遺構は確認されず、事務所建設には支障がないとの所見が得られたため、平成 29 年度に工事実施にいたったものである。

佐紀部事務所建て替えに関わる工事としては、新事務所とその付帯施設の整備、既存事務所とその付帯施設の撤去、既存車庫兼倉庫の撤去、既存事務所跡地となる渡土堤上への人止め柵設置などが計画された。これらの工事に対して、当部では、各工事の掘削時に現地の陵墓職員が立ち会うことはもちろん、要所と考えられる新事務所基礎設置と既存事務所撤去に伴う掘削時には、陵墓調査室員も立ち会わせることを予定していた。工事は、近在する平城天皇楊梅陵参道沿いブロック塀改築工事も加えられて、平成 29 年 10 月 21 日から平成 30 年 3 月 26 日までを工期として発注されたが、新事務所の基礎が設置された後に、上屋建築資材の仕様変更、その乾燥期間を確保するための工期延長などの契約変更が重ねられた結果、工期は 30 年度内まで延長されることとなり、掘削予定の工程も多くが 30 年度にずれ込むことになった。そのため本稿で報告するのは、29 年度中に掘削が行われた、新事務所とその付帯施設の整備工事の一部のみである。なお、一括発注された楊梅陵参道のブロック塀改築工事は、構想段階では掘削を伴う工法となる見込みであったが、工事担当部署による検討の結果、発注時には掘削を伴わない工法が採用されたため、立会調査の対象外となつた。こちらの工事は 29 年度中に実施済みである。

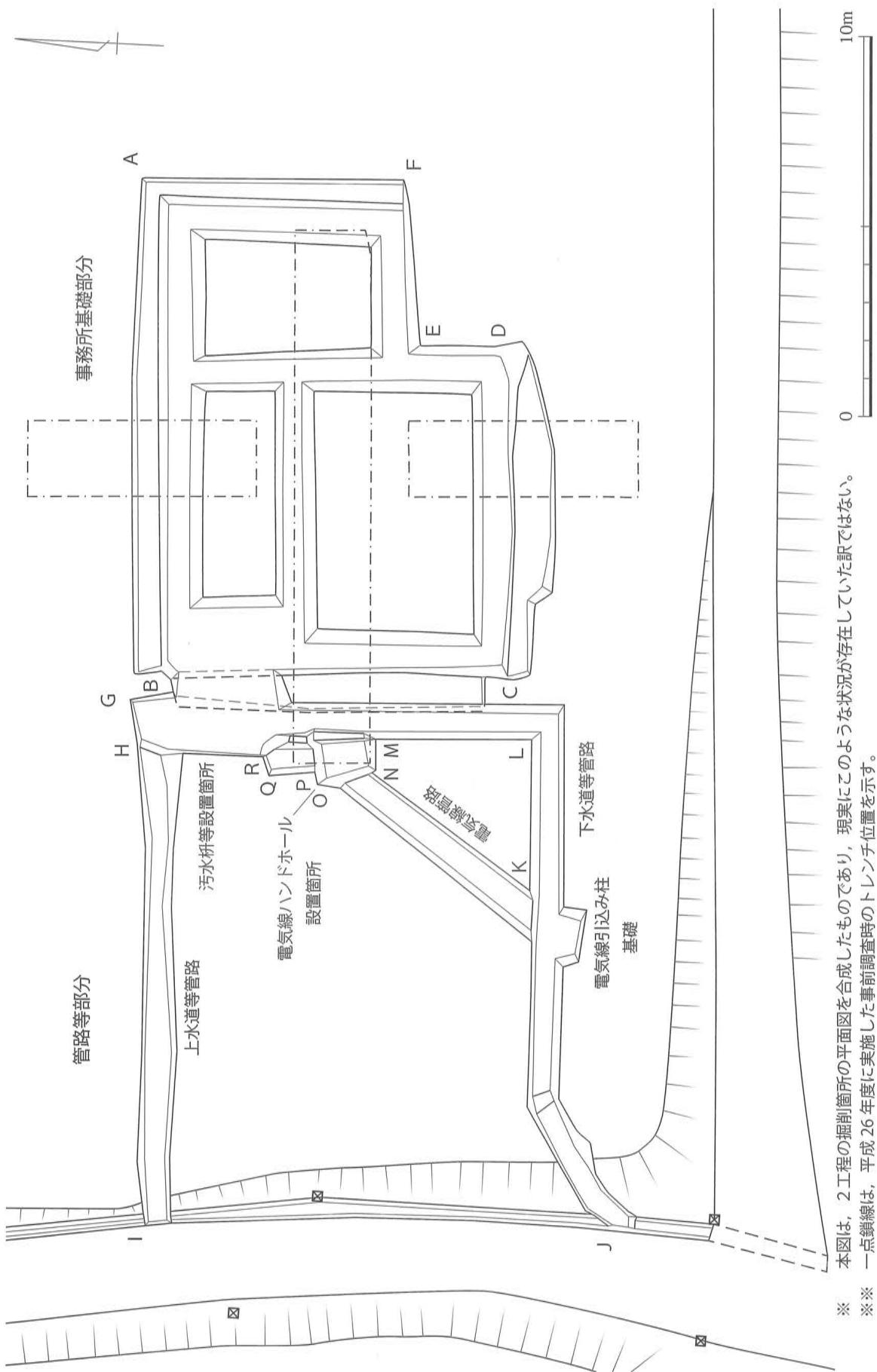
既に述べたように、新事務所とその付帯施設の整備工事に際しては、掘削規模が最も大きい新事務所の基礎部分の掘削時に陵墓調査室員が加わり、その他の付帯施設に関する掘削については現地陵墓職員が対応することを想定していた。しかし、新事務所基礎部分について行われた管路等の掘削時に、土中の深い位置から遺物が出土したとの報を受けたため、急遽陵墓調査室員が状況の確認に赴いた。陵墓職員による立会調査は、平成 29 年 12 月 18 日から翌年 2 月 24 日の間、断続的に行われた掘削・埋め戻しに伴って行われ、この



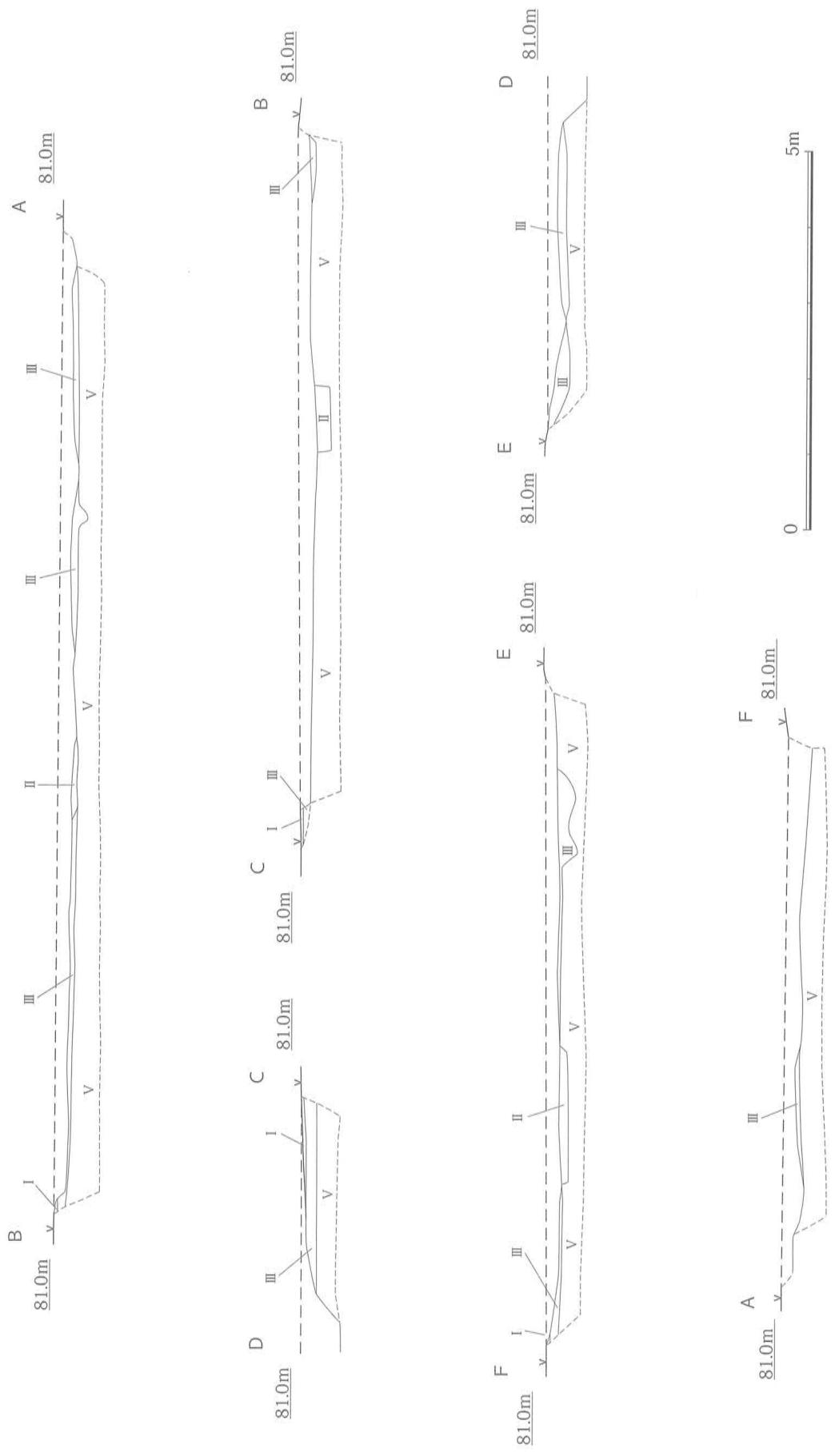
第1図 狹木之寺間陵 佐紀三陵地形図 (1/2500)

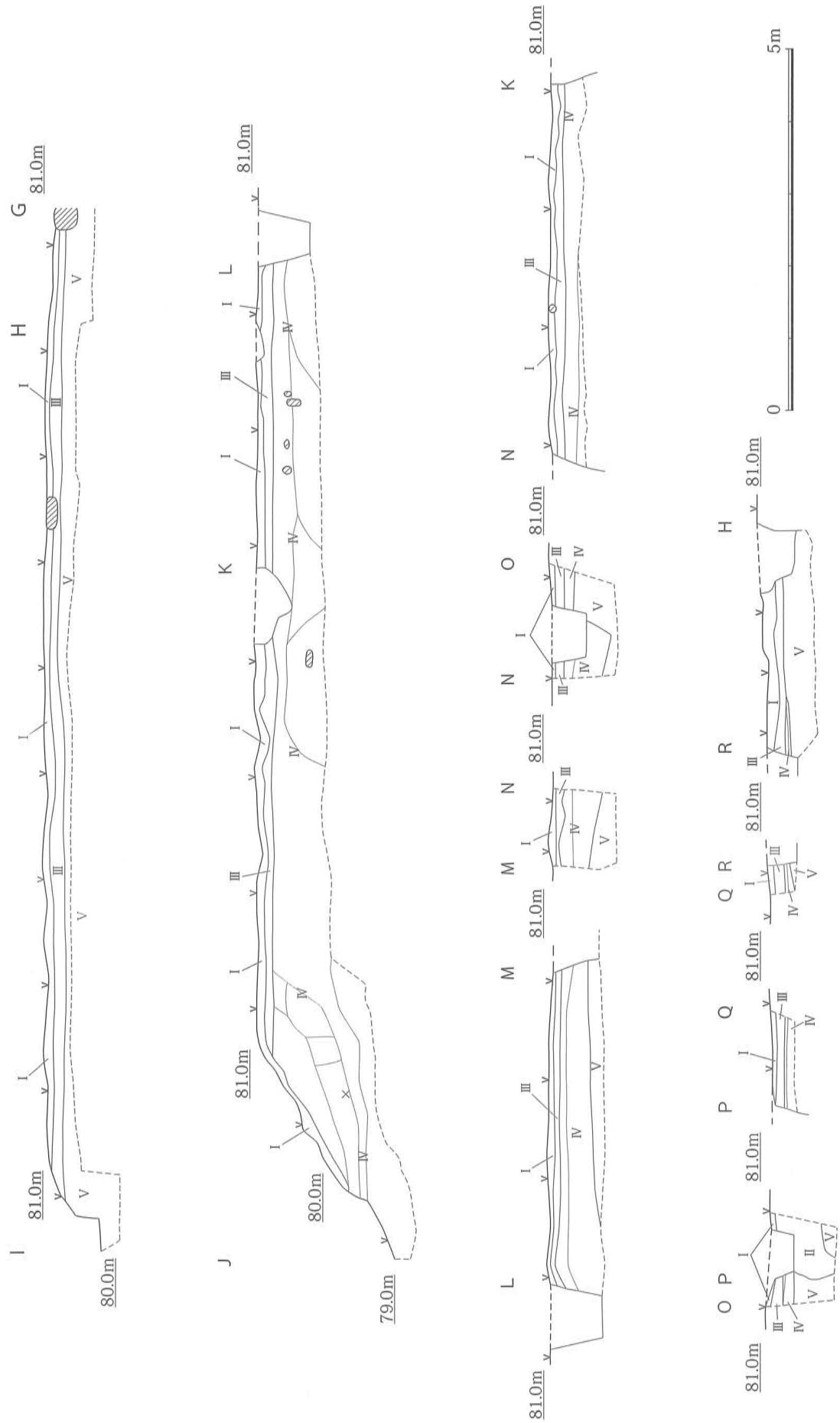


第2図 狹木之寺間陵 掘削箇所位置図 (1/500)



第3図 狹木之寺間陵 挖削箇所平面図 (1/150)





うち、新事務所基礎部分の掘削が行われた12月18日～22日の5日間と、管路部分掘削後の2月19・20日の2日間については、陵墓調査室員が現地調査に加わった。なお、陵墓調査室員滞在中の12月22日には、歴史学・考古学の16学・協会の代表者に対し、新事務所基礎部分の調査箇所の公開を行った。

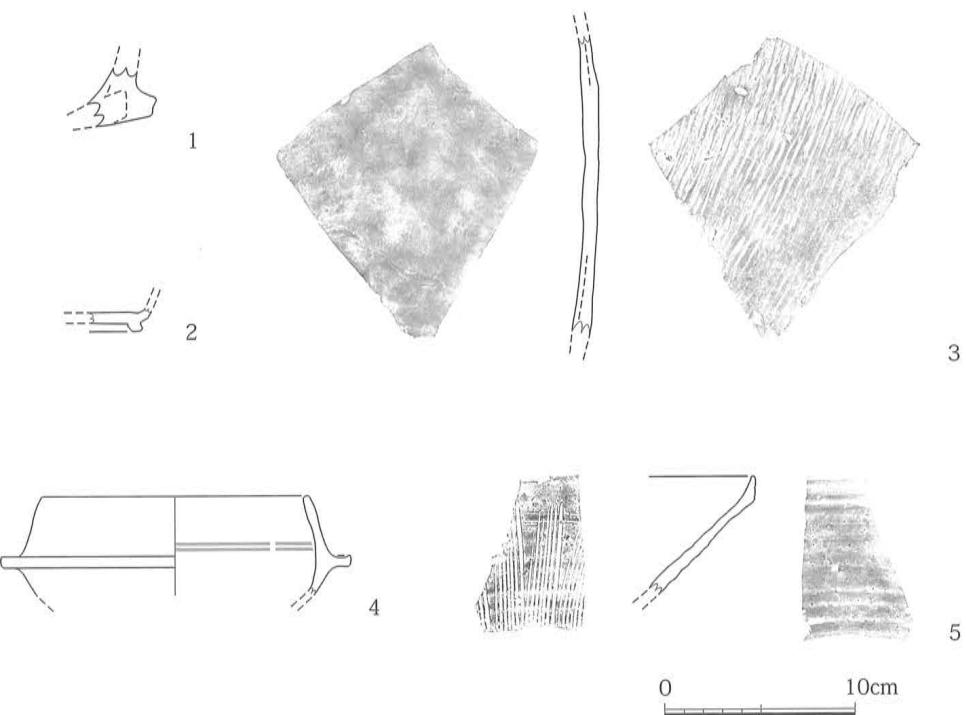
冒頭で触れたように、新しく建てられる部の事務所は、執務スペース、生活スペース、車庫・倉庫を一体化させることを基本としており、佐紀部事務所においては、景観に配慮し、それら3スペースをL字形に配した平面形が選択された⁽⁷⁾。各スペースの規模は、壁体の心心間で、執務スペースが長さ5.5m、幅4.0m、生活スペースが長さ6.5m、幅3.0m、車庫・倉庫が長さ7.5m、幅5.0mであり、掘削は、各壁体下の基礎設置部分について、幅1.0～1.2m、深さ0.5～0.6mの規模で行われた。ただし、生活スペースの西辺は、汚水枠等を設置するため、掘削の幅は2.2mほどになった。また、建物外周に犬走りが設置されることから、その部分についても掘削があり、その規模は、幅1.0m、深さ0.2mの範囲であった（第2・3図、図版11-1）。

事務所基礎部分における掘削箇所の土層は、その性格から、表土層（I層）、事前調査のトレーナーの埋め戻し土の層（II層）、陵墓地として取得以前に農地であった際の耕作あるいは樹木の根などによって搅乱されたものと考えられる土層（III層）、地山層（V層）の4層に大別された（第4図、図版11-2～7）。こうした土層の状況は、事前調査における所見と変わるものではない。なお、事務所基礎部分の掘削中には遺物を確認することはできなかった。

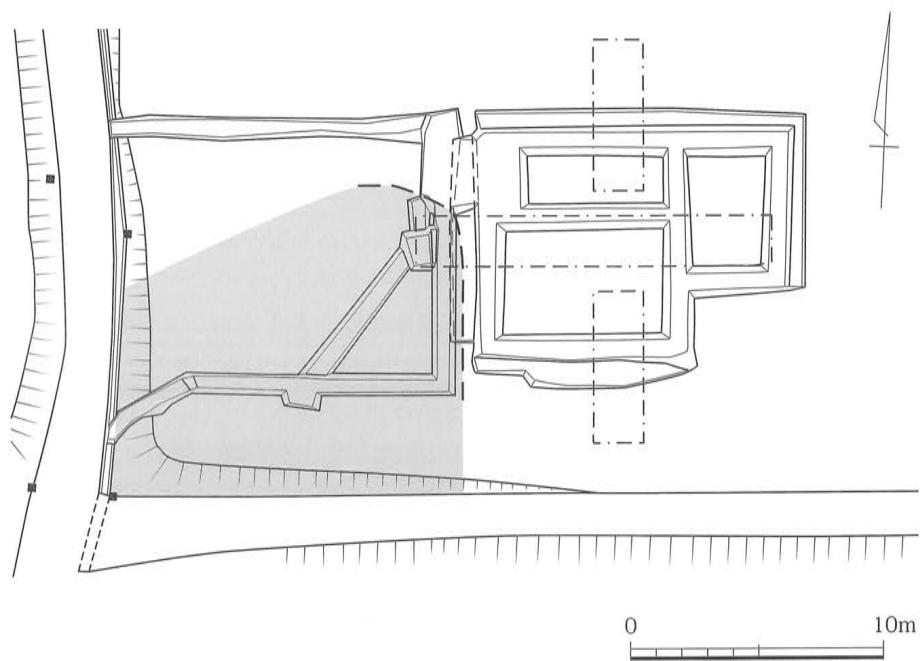
事務所基礎にコンクリートが打たれたあと、平坦面の西側において上水道、下水道、電気線などを敷設するための管路やハンドホール、引込み柱を設置する箇所の掘削が行われた。各所の掘削の規模は、南端平坦面の北端付近を走る上水道等の管路が、長さ約13.0m、幅0.7～1.2m、深さ0.4～1.0m、途中で直角に折れ曲がり、平坦面の南寄りを走る下水道等の管路が、長さ約21.0m、幅0.7～0.9m、深さ0.7～1.6m、ハンドホール設置箇所から方向を変え、下水道管路の半ばまでを斜めに走る電気線の管路が、ハンドホール設置箇所を挟んで、長さ約7.2m、幅0.8～0.9m、深さ0.6m、電気線引込み柱の基礎が、長さ1.7m、幅0.6m、深さ1.3m、電気線ハンドホール設置箇所が長さ1.5m、幅1.2m、深さ1.0m、汚水枠等設置箇所が長さ4.0m、幅1.6m、深さ0.7mであった。上水道管等と下水道管等の管路にとりわけ深い箇所があるが、これは、それぞれ西側道路にまで延びていた公共の上下水道に接続させるために、平坦面と道路との高低差分深く掘る必要があったためである（第3・5図、図版11-8、12-1～8）。

管路等部分における掘削箇所の土層の様相は、事務所基礎部分と大きく異なるものであった。具体的には、事務所基礎部分でI～III層とV層とした層の間に、大規模な造成土層が存在していることを確認した（IV層）。この平坦面において、その西寄りに遺物を包含する造成土層が存在していることは事前調査の際にも確認していたが⁽⁸⁾、その続きとなるものである。事前調査時に確認していたのは、埴輪や瓦を包含する黄灰色系の土による造成土層であったが、今回の掘削範囲では、湛水地の浚渫土と思われる暗灰色の粘土や、茶系や橙系の色調を呈する土が用いられていることも確認した。造成土層は南西方向に行くに従い厚くなっている、平坦面南西角近くでは、地表面からおよそ1.6mの深さまで掘削しているにも関わらず、地山層に至らなかった。

今回の調査に伴う遺物は、いずれも管路等部分の掘削中に出土したものである。総数は37点で、埴輪、土師器、須恵器、陶器、磁器など、古墳時代から近世のものまで認められる（第6図）⁽⁹⁾。1は埴輪片で、朝顔形埴輪の、頸部から口縁部へ屈曲する部分である。断面が黒色を呈しており、野焼き焼成によるものと思われる。電気線ハンドホール設置箇所に近い下水道等管路の造成土中から出土した。埴輪片は事前調査においても今回においても出土しているが、窯窯焼成と判断されるものは含まれていない。2は、高台付きの須恵器の壺である。奈良時代のものであろう。3は、同じく須恵器で、甕の胴部と思われる。外面にはタタキ痕が認められるが、内面の当て具痕は丁寧にナデ消されている。平坦面南西角に近い下水道等管路の造成土中から出土した（第5図J-K-L間断面図×印）。4は、土釜か焙烙か判断に迷うものである。口縁部は内傾し、その端部は丸く收められている。鍔は、幅が狭く、強いナデにより上面は凹むものの、その断面



第6図 狹木之寺間陵 出土品実測図 (1/4)



第7図 狹木之寺間陵 造成土範囲想定図 (1/300)

形状はおおよそ長方形を呈する。胴部は、鍔の直下から底部に向かっての湾曲を始めており、鍔より下方の外面には煤が付着する。5は近世の擂鉢である。内面の擂り目は7本を1単位とした櫛書きによるもので、口縁部に直交する方向で、密に施されている。外面は、口縁部付近で上方に屈曲して直立する面をなし、そこに工具による沈線1条とナデによるものかと思われる凹線1条が確認できる。断面は灰色、口縁部外面から内面は赤褐色、外面の口縁部より下は黄灰色を呈する。

今回の調査によって、狭木之寺間陵附属地南端平坦面の南西部には、かなり大がかりな造成土が存在することが明らかになった（第7図）。この造成土を伴う土地の改変が、一度の機会に行われたものであるのか、あるいは、時間を隔てて段階的に行われたものであるのかという点については、ほとんどの遺物の出土層位が不明であることもあり、明らかにすることが出来ない。ただ、遺物からは、この改変が、狭木之寺間陵や高野陵の築造、あるいは平城京の造営などに伴うものではなく、それらとはまったくの無関係に後の時代に行われたものであることは指摘できよう。現状では、この平坦面のさらに西側、道路を挟んだ高野陵側にもほぼ同じ高さの平坦面が広がっているが、これについても、後世の改変によって造作されたものである可能性が高いと思われる。

以上、今回の調査範囲では、遺物の出土はあったものの、明確な遺構の存在は確認されず、新事務所の工事はそのまま施工された。一連の工事のうち、30年度に持ち越しとなつた箇所における調査については、次号で報告する予定である。

（有馬伸）

註

(1) 加藤一郎「深草部改築予定地における埋蔵文化財調査」『書陵部紀要』第60号、宮内庁書陵部、2009年。

有馬伸「傍丘部事務所改築工事に伴う立会調査」同上書。

有馬伸「長慶天皇 嵐嶽東陵嵯峨部事務所改築工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』第61号〔陵墓篇〕、宮内庁書陵部、2010年。

清喜裕二「後二條天皇 北白河陵神楽岡部事務所改築工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』第62号〔陵墓篇〕、宮内庁書陵部、2011年。

徳田誠志・加藤一郎「百舌鳥部事務所改築工事箇所の事前調査」『書陵部紀要』第64号〔陵墓篇〕、宮内庁書陵部、2013年。

徳田誠志・加藤一郎「百舌鳥部事務所建替工事箇所の立会調査」『書陵部紀要』第65号〔陵墓篇〕、宮内庁書陵部、2014年。

土屋隆史「深草部事務所改築工事に伴う事前調査」『書陵部紀要』第66号〔陵墓篇〕、宮内庁書陵部、2015年。

(2) 本報告対象である佐紀部事務所を例に挙げると、事務所の床面積は、既存のものが約18m²、新築したものが約80m²である。

(3) 平成30年度末時点で建て替えを終えているのは、佐紀部を除くと、畠傍監区傍丘部（平成19年度／武烈天皇傍丘磐坏丘北陵前）、桃山監区嵯峨部（同20年度／長慶天皇嵯峨東陵・承朝王墓前）、月輪監区神楽岡部（同21年度／後二條天皇北白河陵・後醍醐天皇太子邦良親王墓前）、古市監区百舌鳥部（平成24年度／仁徳天皇百舌鳥耳原中陵前）の4事務所である。このうち、傍丘部と神楽岡部の事務所は、スペースの関係から、建て替え時に場所を変更している。

有馬伸「傍丘部事務所改築工事に伴う立会調査」、前掲註(1)。

清喜裕二「後二條天皇 北白河陵神楽岡部事務所改築工事に伴う立会調査」、前掲註(1)。

(4) 福尾正彦「狭木之寺間陵整備工事区域の調査」『書陵部紀要』第38号、宮内庁書陵部、1987年。

福尾正彦・徳田誠志「狭木之寺間陵整備工事区域の調査」『書陵部紀要』第43号、1992年。

(5) 奈良県遺跡地図では、附属地西側を走る道路付近以西を平城京右京北辺坊、南側を走る道路以南を平城宮北方遺跡の範囲としている。

奈良県教育委員会「奈良県遺跡地図Web」(<http://www.kashikoken.jp/scripts/RemainsNara.cgi>)

(6) 有馬伸「佐紀部事務所建替予定箇所における事前調査」『書陵部紀要』第67号〔陵墓篇〕、宮内庁書陵部、2016年。

(7) 部の事務所における各スペースの配置方法については、敷地の広さや景観など、各部それぞれの事情があるため、一定にはなっていない。

(8) 事前調査報告でのIV層。

有馬 伸「佐紀部事務所建替予定箇所における事前調査」、前掲註（6）。

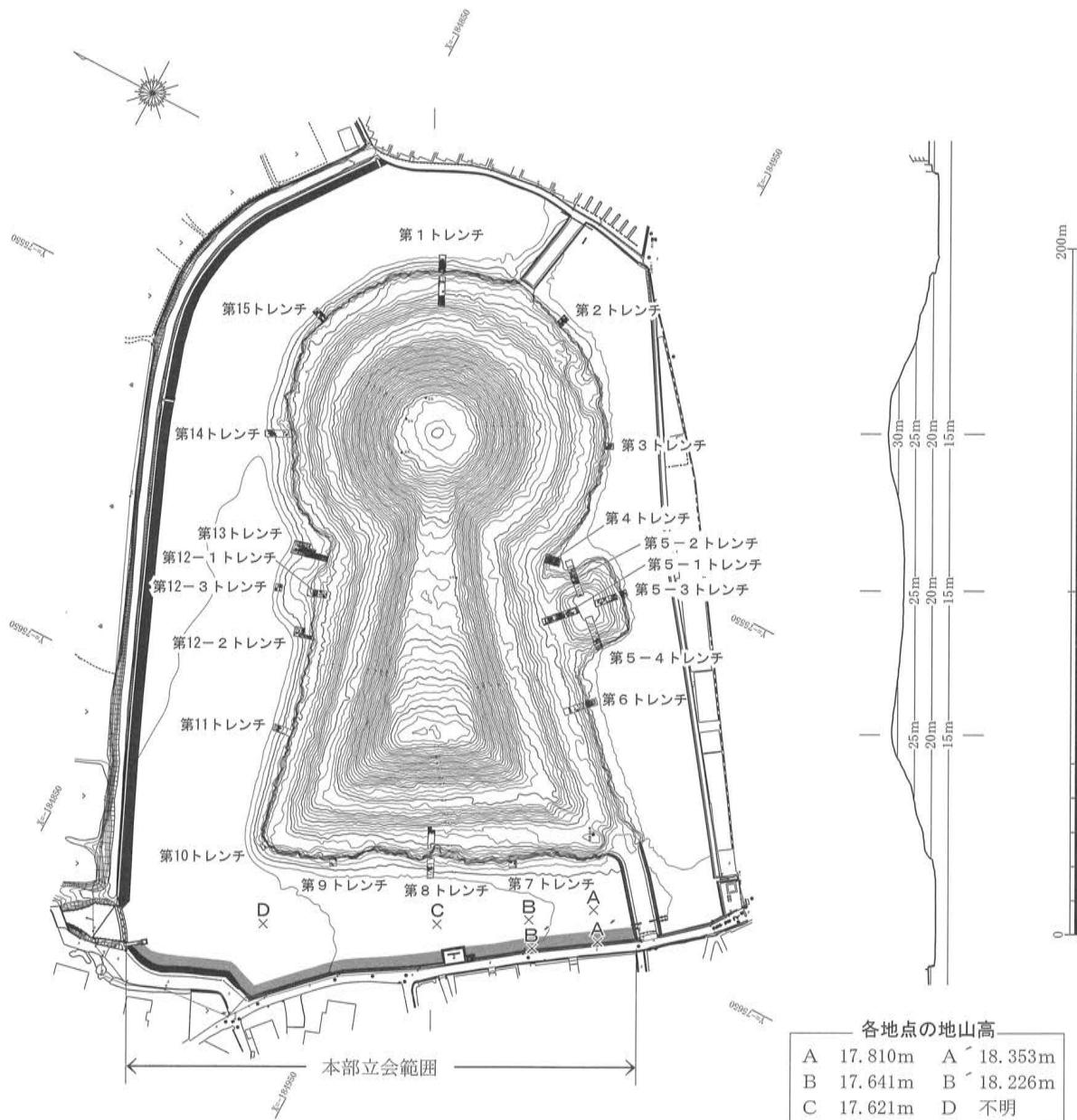
- (9) 出土遺物に関しては、当室の横田真吾氏から情報提供をはじめとする様々な支援を受けた。記して謝意を表する。しかし、
こうした情報を完全に咀嚼できているとは言い難いため、以下の記述において誤りがあれば、その責は全て筆者に帰する
ものである。

五十瓊敷入彦命 宇度墓外堤護岸その他整備工事に伴う立会調査

はじめに

五十瓊敷入彦命宇度墓（以下、「本墓」という）は、大阪府泉南郡岬町に所在する前方後円墳である。本墓の遺跡名は、宇度墓古墳となっている。本報告は、本墓整備工事のなかでも、とくに外堤護岸整備のための掘削と濠内堆積土浚渫にともなう立会調査にかんするものである（第8図）。

標記の立会調査は、平成29年度に実施した外堤護岸基礎部分と濠内堆積土掘削の際に、施工地における遺構・遺物の有無を確認することを目的として、陵墓課職員が平成29年12月4日から12月8日までおこなった。なお、上記以外の工事期間中は、古市陵墓監区事務所職員が隨時立ち会った。



第8図 宇度墓 調査地位置図 (1/2,000)

1 立会地点の状況

土層 立会調査地点における土層は、既存外堤護岸基礎（I）、濠内堆積土（II）、地山（III）が確認された。外堤護岸基礎掘削部分では、III層の地山直上にI層の既存外堤基礎があることから、地山を削り平坦にした上に基礎を構築したことがわかる。濠内堆積土掘削部分では、A地点においてII層の濠内堆積土がIII層の地山上に堆積していて、II-1層からII-4層まで分けられる。

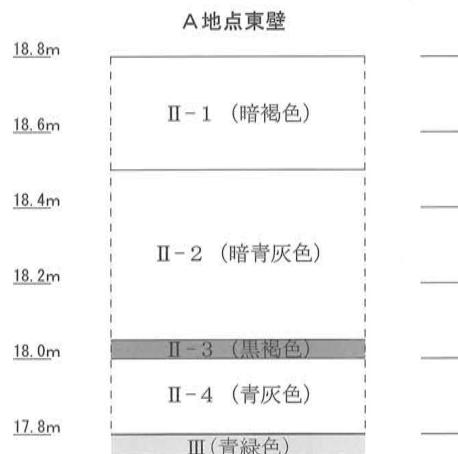
外堤護岸基礎掘削 立会調査をおこなった前方部西側の外堤護岸基礎掘削箇所では、遺構は確認できなかった。既存の基礎は、平坦な地山の直上に造られていて、この部分の斜面や葺石は、どのような原因によるものか不明であるが、既に浸食ないし削平されて残っていない可能性がある。既存基礎は礫を多量に含む青緑色の地山上にバラスを敷き、その上に角材を据えてから、鉄筋入りのコンクリート基礎を置いている。

濠内堆積土掘削 全体の浚渫をおこなう前に、AからDまでの4箇所で濠内堆積土の深さを確認した。

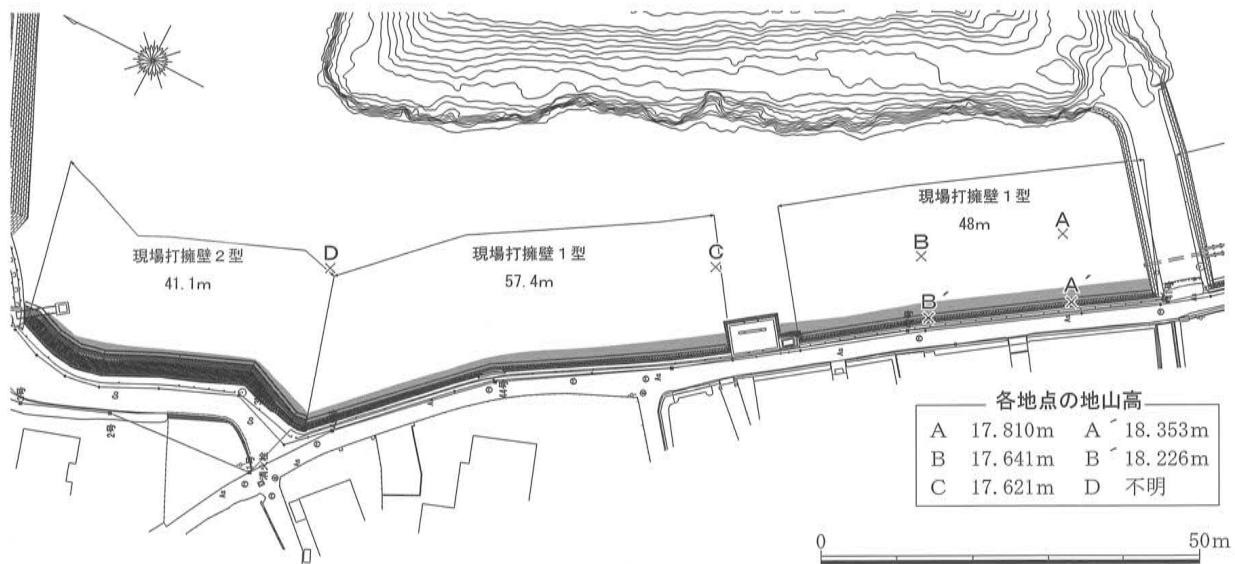
前方部南寄りのA地点では、濠内堆積土から地山（濠底）までが約1mであった。地山は標高17.81mで検出した。濠内堆積土のII-1層は暗褐色でヘドロ状の柔らかい土（厚さ約30cm）、II-2層は暗青灰色の土（厚さ約45cm）、II-3層は黒褐色土（厚さ約5cm）、II-4層は青灰色の土（厚さ約20cm）、III層の地山は青緑色の土で礫を多く含んでいた（第9図）。

II-3層が黒褐色となっているのは、この時期に濠が堆積土によって埋まり、落葉などの有機質が堆積したためと考えられる。II-2層は、その色調から空気にあまり触れておらず、水分を多く含んでいることから、II-3層より後の時期に外堤をより高く盛土して、周濠の貯水量を増やした結果と考えられる。ゆえに、II-3・II-4層間の高さ、標高約18mは、本墓築造当時の濠水における満水位を示している可能性があり、そのことは平成26年度事前調査の結果⁽¹⁾とも整合的である。少なくとも、A地点については、後世の貯水量を増やすことや浚渫を目的とした濠底にまでおよぶ掘削はなかったと考えられる。

前方部やや南寄りのB地点では、濠内堆積土から地山（濠底）までが約1.2mであった。地山は標高17.641mで検出した。



第9図 宇度墓 A地点東壁模式図(1/20)



第10図 宇度墓 外堤護岸工事平面位置図 (1/1,000)

B地点の濠内堆積土は、A地点に比べると柔らかく、掘削してもすぐに埋没してしまい、堆積状況の観察はできなかった。

前方部中央のC地点では、A・B地点に比べると濠内堆積土が柔らかく、掘削するそばから埋没してしまい、堆積状況の観察はできなかった。地山は標高17.621mで検出した。

前方部北寄りのD地点では、濠内堆積土を2m以上掘っても地山に到達せず、掘削するそばから埋没してしまい、堆積状況の観察および地山高の確認はできなかった。

AからDまで掘削した結果、D地点の地山高は不明であるが、周辺地形と同じく南から北へと緩やかに地山（濠底）が下方傾斜している状況が確認できた。

2 遺物

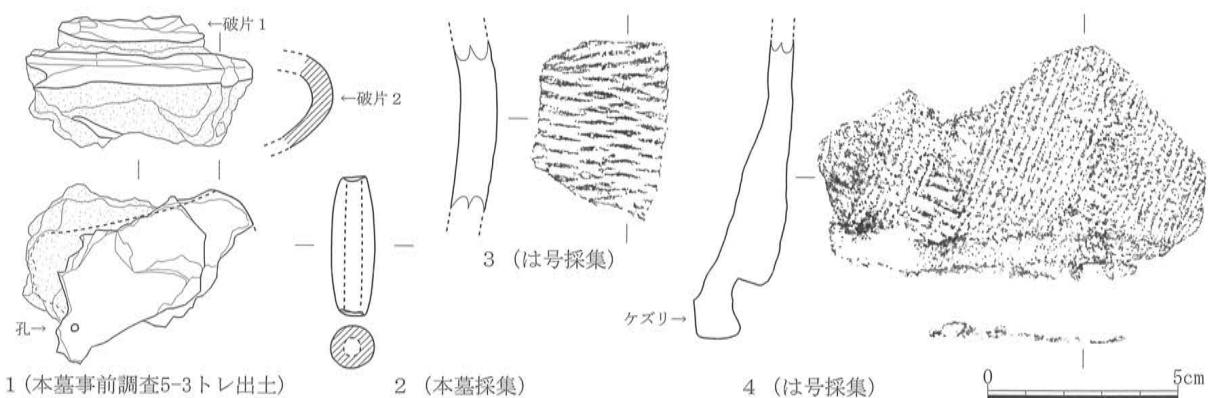
立会調査で排土中より採集した遺物は、埴輪片3点、磁器片1点、土錘1点である。埴輪については、円筒埴輪片が2点と形象埴輪片らしきものが1点あるが、表面の磨滅が著しく、磁器片も含めいずれも小片のため、図化にたえなかった。ここでは、立会調査期間中に本墓採集の土錘と本墓飛地は号採集の須恵器・埴輪に加え、平成26年度事前調査時に出土した鉄製品についても、保存処理およびX線写真撮影が完了したので、その結果について報告する（第11図、図版13・14）。

本墓採集遺物 2の土錘は、長さ3.65cm、幅1.15cmで、中央に約4mmの孔が貫通している。淡黄褐色で素焼きのものである。

本墓飛地は号採集遺物 3の須恵器は、壺・甕類体部片である。外面にはタタキ痕が残るが、内面に当具痕がないことから、丁寧にナデ消したものと考えられる。色調は暗青灰色で、焼成は良好である。4の埴輪は、円筒埴輪の底部片である。外面には、タタキ痕の上からハケメを施す。底部外面下端は、内側に鋭い角が残るように凹んでいる。内面には、ナデの痕跡が残るが、下端はケズリによって整えられている。

本墓出土遺物（平成26年度事前調査） 1の鉄製品は、平成26年度事前調査時に5-3トレチ流土より出土した。発見当初は鎧が付着し、何であるのか、何片からなる物かも不明であったが、平成28年度に実施した保存処理事業の結果、2つの破片からなることが明らかとなった。なお、本報告に掲載した鉄製品の写真（図版13-7・8、図版14）は、事業委託業者の株式会社文化財ユニオンによるものである。破片1は、板状の鉄片であり、保存処理およびX線撮影の結果、孔があることが判明した。詳細は不明であるが、鉄製甲冑の部品には、薄い板状で孔を有するものがあることから、これも甲冑の一部という可能性がある。

破片2は、板状の鉄を大きく曲げたものであることが判明した。U字形の残存断面が確認できることから、鉄斧の袋部とも考えられる。鉄斧の場合、袋部の反対側で、さらに外側に続いていたと思しき痕跡があることから、有肩袋状鉄斧の可能性がある。

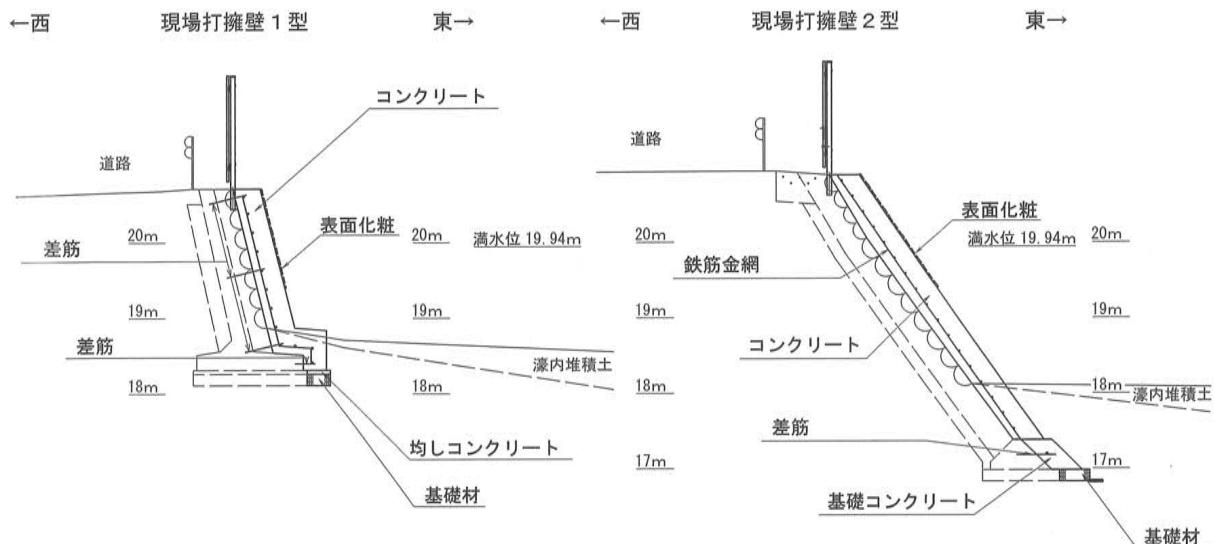


第11図 宇度墓 本墓・飛地は号 出土・採集遺物実測図 (1/2)

まとめ

今回の立会調査は、宇度墓外堤および周濠の範囲内であったため、遺構・遺物の出土に注意した。調査の結果、本墓にともなう遺構は確認できなかったが、埴輪などの遺物を採集した。また、濠内堆積土掘削では、濠内における地山の高さ（濠底）を確認し、本墓築造時の満水位が、標高約 18 m付近にあったのではないかと推定した。立会調査と直接関係はないが、飛地は号から採集した遺物や本墓の事前調査時に詳細が不明であった鉄製品の保存処理成果についても、報告をおこなった。上述の通り、立会調査では遺構が確認されなかったため、工事については予定通り施工した（第 10、12 図）。

（横田真吾）



第 12 図 宇度墓 外堤護岸工事断面模式図 (1/100)

註

- (1) 清喜裕二・加藤一郎・横田真吾「五十瓊敷入彦命 宇度墓整備工事予定区域の事前調査」『書陵部紀要』第 67 号〔陵墓篇〕、宮内庁書陵部、2016 年。

仁徳天皇 百舌鳥耳原中陵第1堤における 遺構・遺物確認のための予備調査

はじめに

仁徳天皇百舌鳥耳原中陵は大阪府堺市堺区大仙町に所在する。当陵は墳長 525 m を超える日本最大の前方後円墳であり、遺跡としての名称は大山古墳である。

今回の調査は、今後の実施が想定される当陵における保全整備工事計画を策定するにあたって、その基礎となる情報を収集するための当陵第1堤上における事前調査の実施に関する予算要求の積算根拠となる情報をえるため、予備的に実施したものである。
(加藤一郎)

1 調査の経過など

調査は平成 29 年 10 月 16 日から 27 日まで実施し、当陵の第 1 堤上に A～D のトレンチを設けた（第 13 図）。当初は A～D の 4 箇所において、それぞれ長さ 3 m × 幅 2 m のトレンチを設ける予定であったが、調査状況などを勘案してトレンチの追加を適宜おこなった。その結果、B トレンチと C トレンチで追加のトレンチを設けたため、計六つのトレンチを調査することとなった。

今回の報告で使用する座標は、 I T R F （国際地球基準座標系）にもとづいた世界測地系の平面直角座標第Ⅳ系をもちいており、図面において使用している方位記号の方角は座標北である。また、高さの基準には東京湾平均海面（T. P.）をもちいた。

なお、調査中には大阪府教育委員会文化財保護課の中西裕見子氏、原田昌浩氏、藤井陽輔氏、堺市文化財課の小谷正樹氏、土井和幸氏、永井正浩氏からご指導賜った。

以下、各トレンチの状況を報告する。

(加藤)

2 各トレンチの状況

(1) A トレンチ（第 14、15 図、図版 15-2）

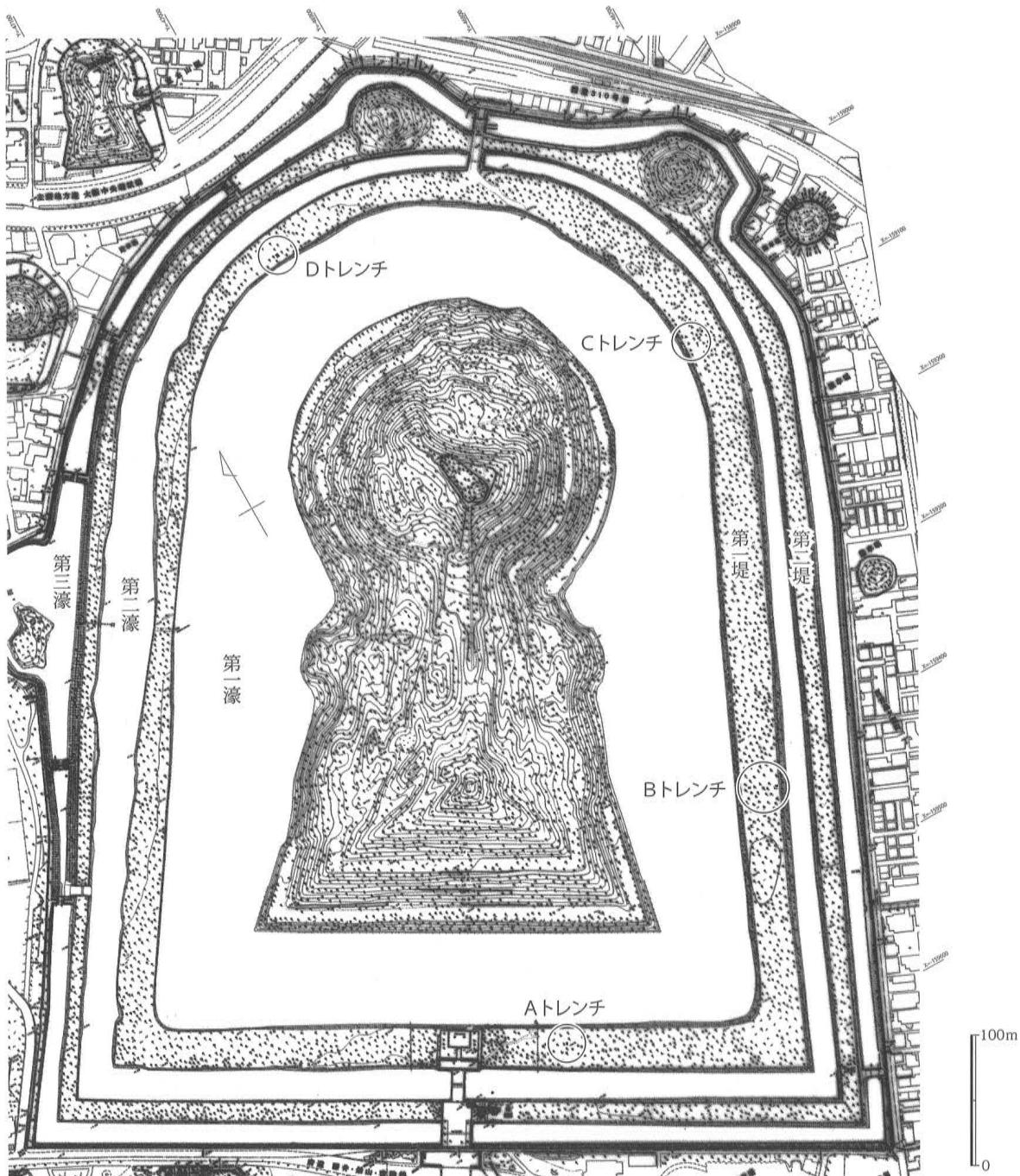
前方部前面に対面する部分の拝所東側に設けたトレンチである。トレンチの大きさは長さ 3 m × 幅 2 m で、第 1 堤上の第 1 濩にも第 2 濩にも面しない中央付近に設定した。

確認された土層は、上から表土（I）、浚渫土である可能性のある土層（II）、流土（III）、盛土（IV）である。II 層は黄灰色粘質土で、粘土ブロックが混じるものであり、百舌鳥陵墓参考地や東百舌鳥陵墓参考地における事前調査の際にみられた浚渫土に類似する。10cm 程度の堆積で、上述した参考地における浚渫土に比べるとかなり土量が少ないため、その可能性があることを指摘することにとどめておく。III 層は暗黄褐色砂質土で、盛土とした IV 層を起源とするものと考える。IV 層は黄褐色砂質土を基調としており、古墳の築造とともに第 1 堤を構築した際の盛土であろう。現在の地表面から 20cm 前後で盛土となっており、第 1 堤の拝所西側の第 2 濩際において、第 1 堤上面端の埴輪列を構成していると考えられる原位置の円筒埴輪を検出した調査時の所見とも齟齬をきたさない⁽¹⁾。

A トレンチでは木の根による搅乱を確認した以外、顕著な遺構は確認されなかった。ただし、流土（III）と盛土（IV）の境界で小さい礫がわずかに確認された点は注意される。第 1 堤上面にバラス敷のようなものが設けられていた可能性も考えておく必要があるかもしれない。なお、出土した遺物は、III 層において埴輪片が 3 点確認された程度である（第 15 図）。

(加藤)

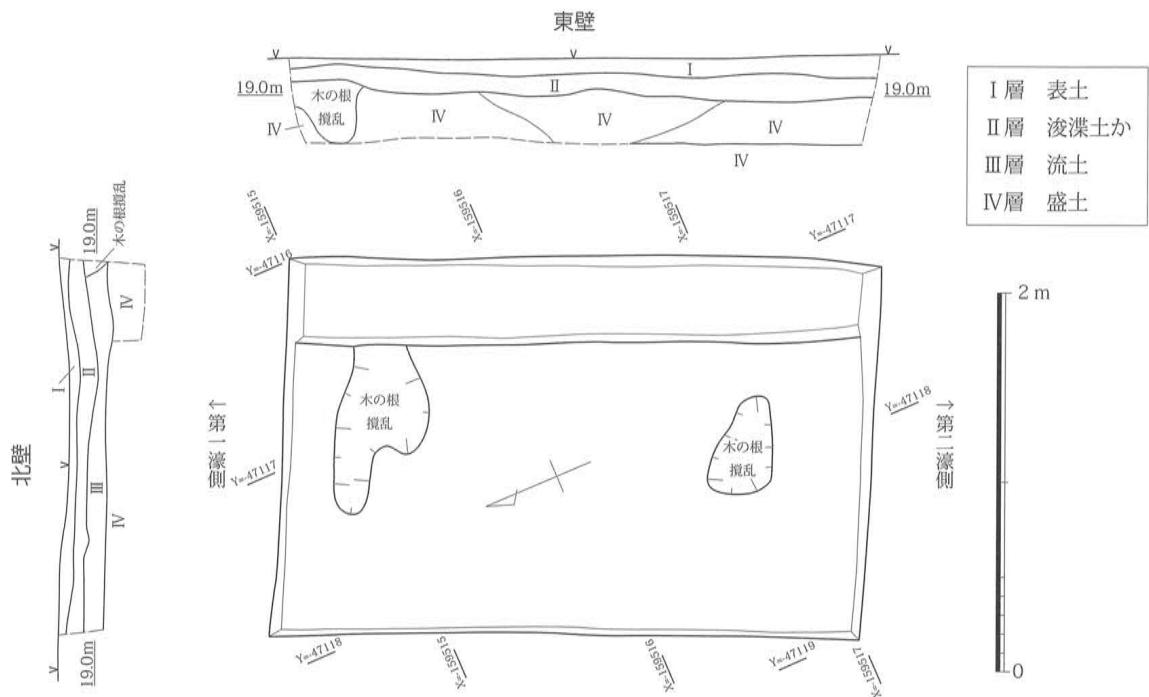
① B トレンチ西側（第 16 図、図版 16） 第 1 堤の東側で前方部の中央付近にあたる箇所に 2 つのトレンチを設けた。本トレンチは第 1 号濠側（西側）に位置する。トレンチの大きさは、長さ 3 m × 幅 2 m である。調査の結果、地表下 30cm 付近で地山を確認した。



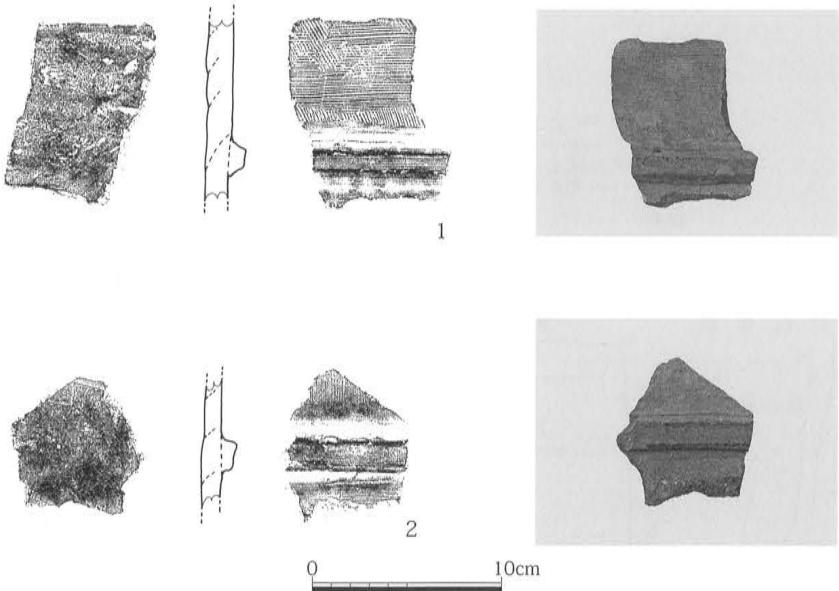
第13図 百舌鳥耳原中陵 トレーンチ配置図 (1/5,000)

確認された土層は、上から表土（I）、第1堤築造後の堆積土（II）、地山（IIIa）、地山（IIIb）であった。表土（I）は厚さ8～20cmであり、堆積土（II）は厚さ10～20cmほどである。堆積土（II）は暗黄褐色を呈しており、ここから3cmほどの埴輪片が多く出土した。

地山（IIIa）は、地表下30cm（標高19.7m）から厚さ10～14cmほどである。褐色に灰色の粘土ブロックが混じる層であり、礫はあまり含まれていない。地山（IIIb）は、地表下40cmから確認した（標高19.6m）。灰色に褐色がマーブル状に混じった色を呈しており、1～5cmほどの礫が多く含まれている。IIIa層とは色調と胎土で区別することができる。この2層には埴輪片が含まれていない。第1堤築造にともなう盛土か、あるいは地山である可能性が考えられたが、盛土単位が確認できることから、地山層である可能性が高い。



第14図 百舌鳥耳原中陵 Aトレンチ平面図・断面図 (1/40)

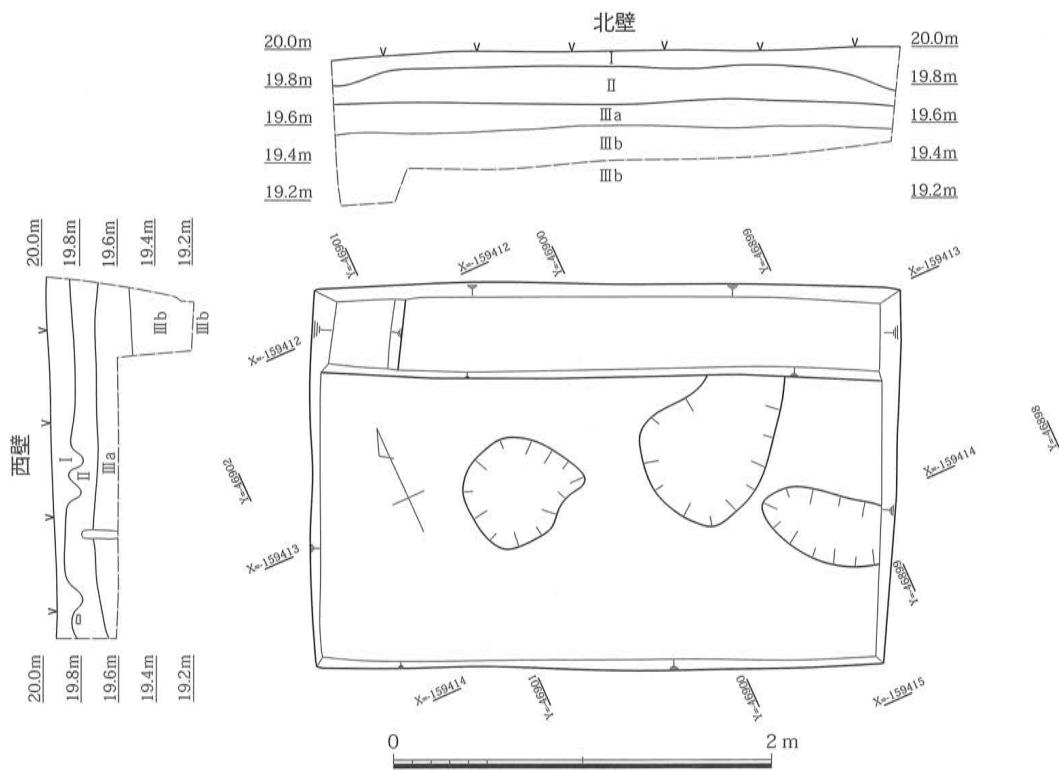


第15図 百舌鳥耳原中陵 Aトレンチ出土 円筒埴輪実測図 (1/4)

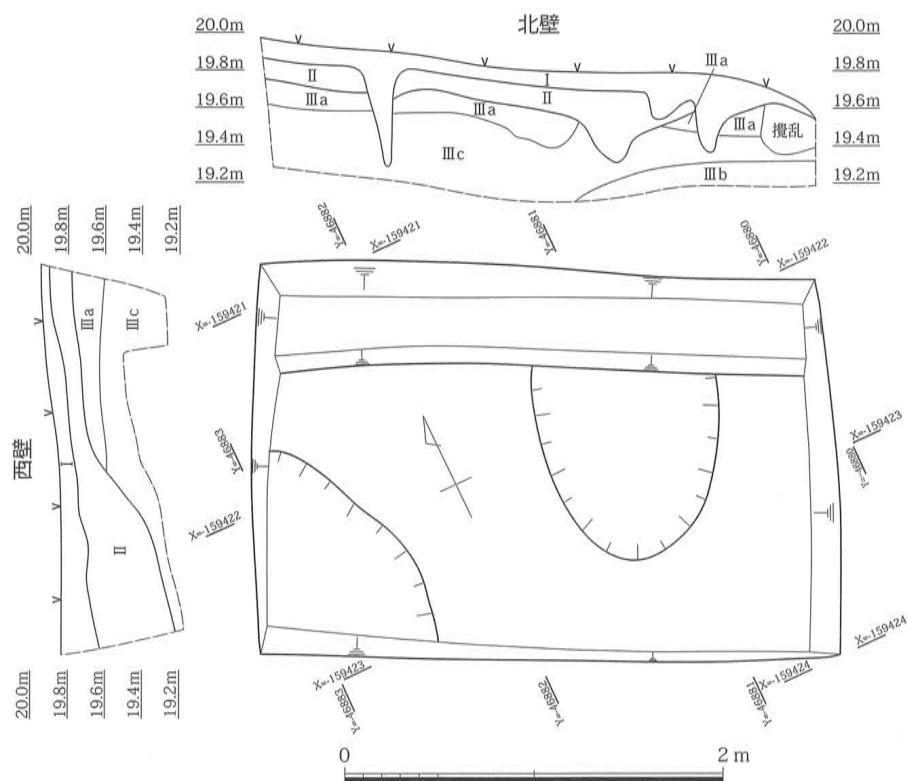
なお、埴輪片は6点出土したが、いずれも摩滅した細片であることから、図化はしていない。

②Bトレンチ東側（第17図、図版17） 本トレンチは第2号濠側（東側）に位置し、堤の平坦面と傾斜面の境付近に設置した。トレンチの大きさは、長さ3m×幅2mである。調査の結果、埴輪片を多数検出するとともに、地表下30cm付近で地山を確認した。

確認された土層は、上から表土（I）、第1堤築造後の堆積土（II）、地山（IIIa）、地山（IIIc）、地山（IIIb）であった。表土（I）は厚さ10cmほどであり、堆積土（II）は厚さ10cmほどである。根攪乱による改変が目立ち、場所によって深さは異なる。堆積土（II）は暗黄褐色を呈しており、ここから3～9cmほどの埴輪片が非常に多く出土した。



第16図 百舌鳥耳原中陵 Bトレーニチ西側 平面図・断面図 (1/40)



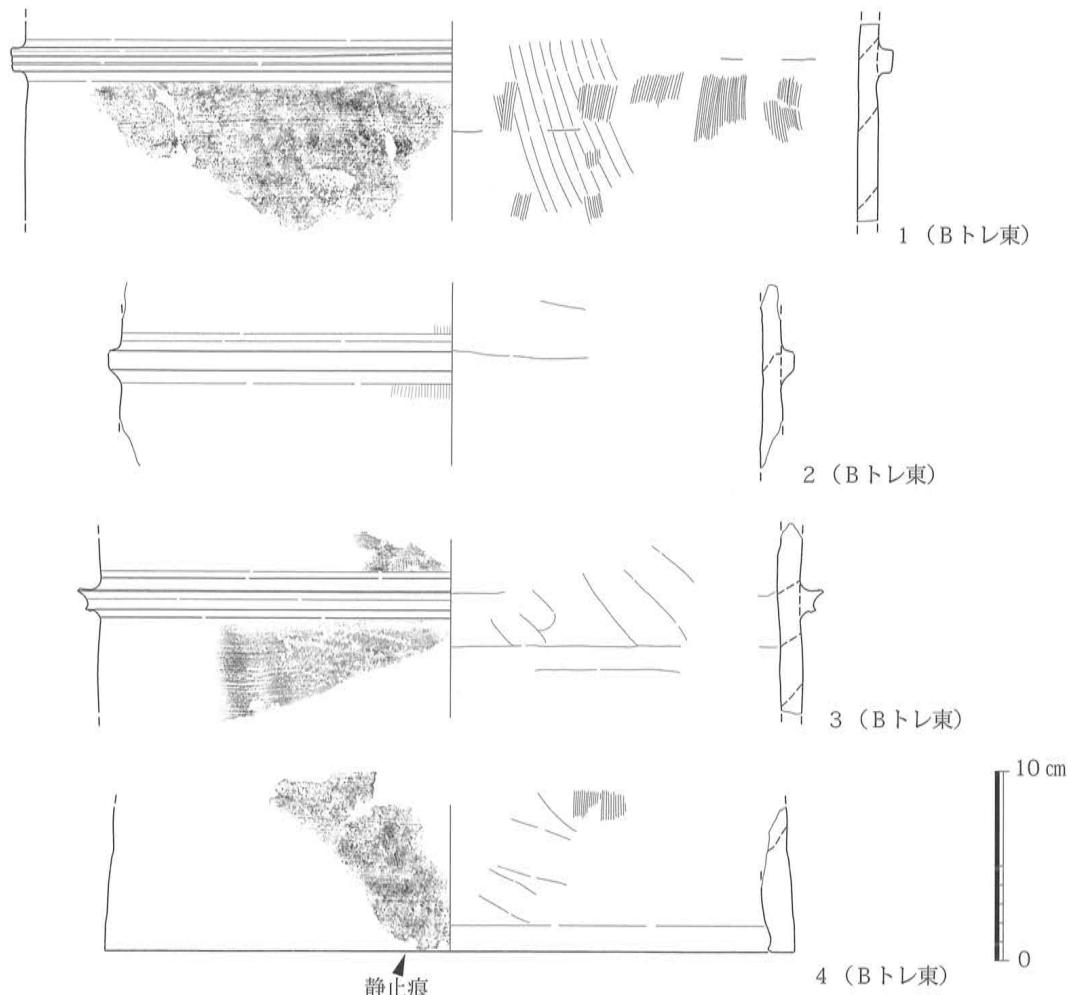
第17図 百舌鳥耳原中陵 Bトレーニチ東側 平面図・断面図 (1/40)

地山（Ⅲa）は、地表下20cm（標高19.7m）から厚さ14～18cmほど確認した。灰色に褐色がマーブル状に混じった色を呈しており、礫は含まれていない。西側トレンチのⅢa層に対応する。地山（Ⅲc）は、地表下30cm（標高19.6m）から確認した。厚さは40cm以上あるようである。Ⅲa層よりはやや明るい色を呈しており、礫は含まれていない。西側トレンチには対応する層はみられない。地山（Ⅲb）は、地表下50cm（標高19.3m）から確認した。Ⅲcとはほぼ同じ色調であるが、1～5cmほどの礫を多く含む点で区別することができる。西側トレンチのⅢb層に対応するが、西側トレンチでは標高19.6mから確認されるのに対して、東側トレンチでは標高19.3mから確認される。場所によって地山層の構成がやや異なっていたようである。この3層には埴輪片は含まれていない。西側トレンチと同様に細かな盛土単位もみられないことから、地山層である可能性が高いと考えている。

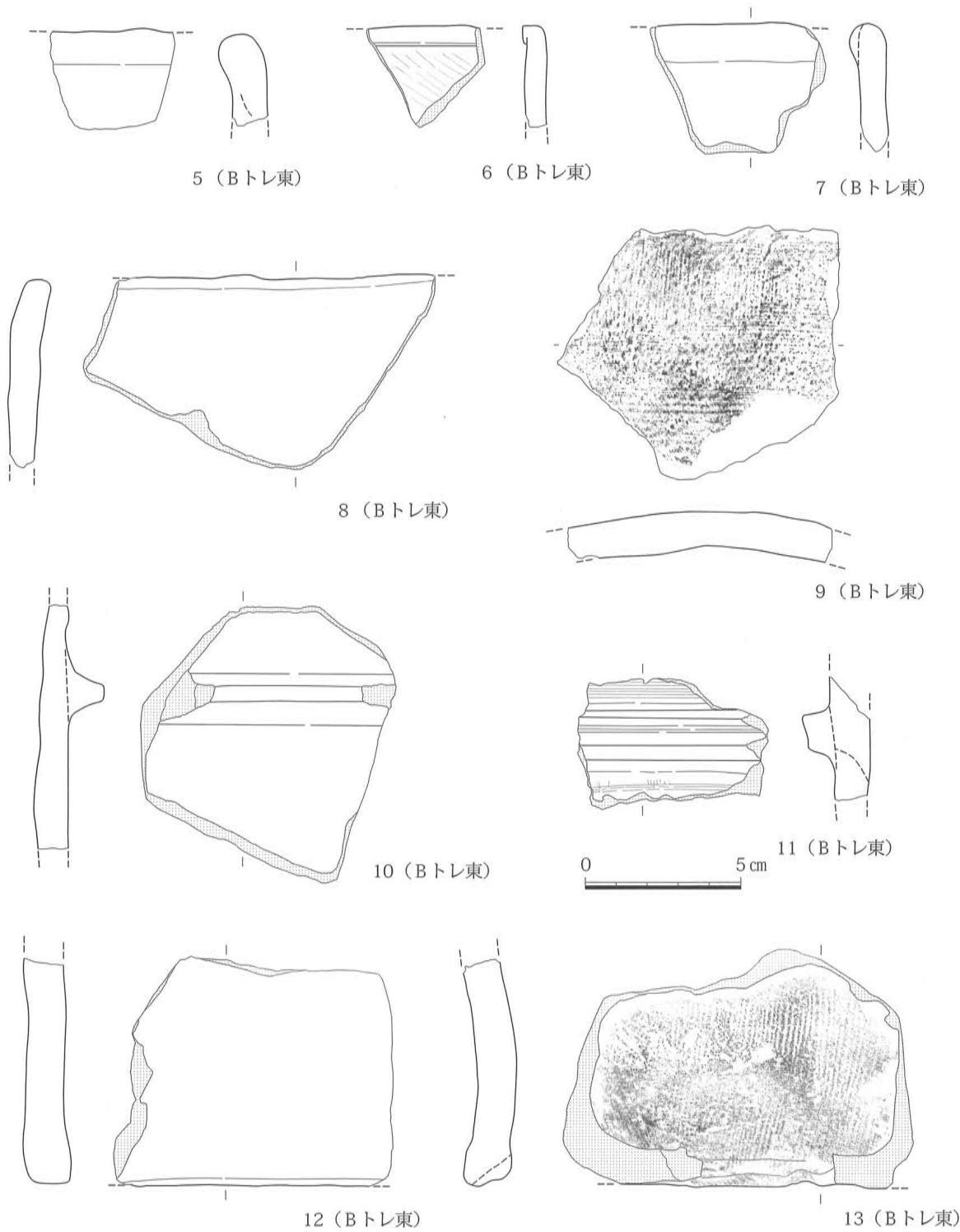
原位置の埴輪を検出することはできなかったが、Ⅱ層からは底部を含んだ非常に多くの埴輪片が出土したことから、周辺にはもともと埴輪列が設置されていた可能性が高いと考えられる。

埴輪（第18, 19図、図版20, 21-1） 径が復元できるものや部位が特定できるものを中心に図化した。全てⅡ層から出土したものである。埴輪は、全て円筒埴輪の破片である。口縁部、胴部、底部の破片が確認できる。

破片からの推測ではあるが、復元径は個体ごとに違いがあり、復元径40cm以上の大型のもの（第18図1）と、35～38cm程度の中型のもの（第18図2, 3, 4）がある。口縁部形態は、外反して端部に丸みもつもの（第19図5, 8）と、端部を肥厚させたもの（第19図6, 7）があり、突帯形態は、断面台形のもの（第



第18図 百舌鳥耳原中陵 Bトレンチ出土品実測図（1）（1/4）

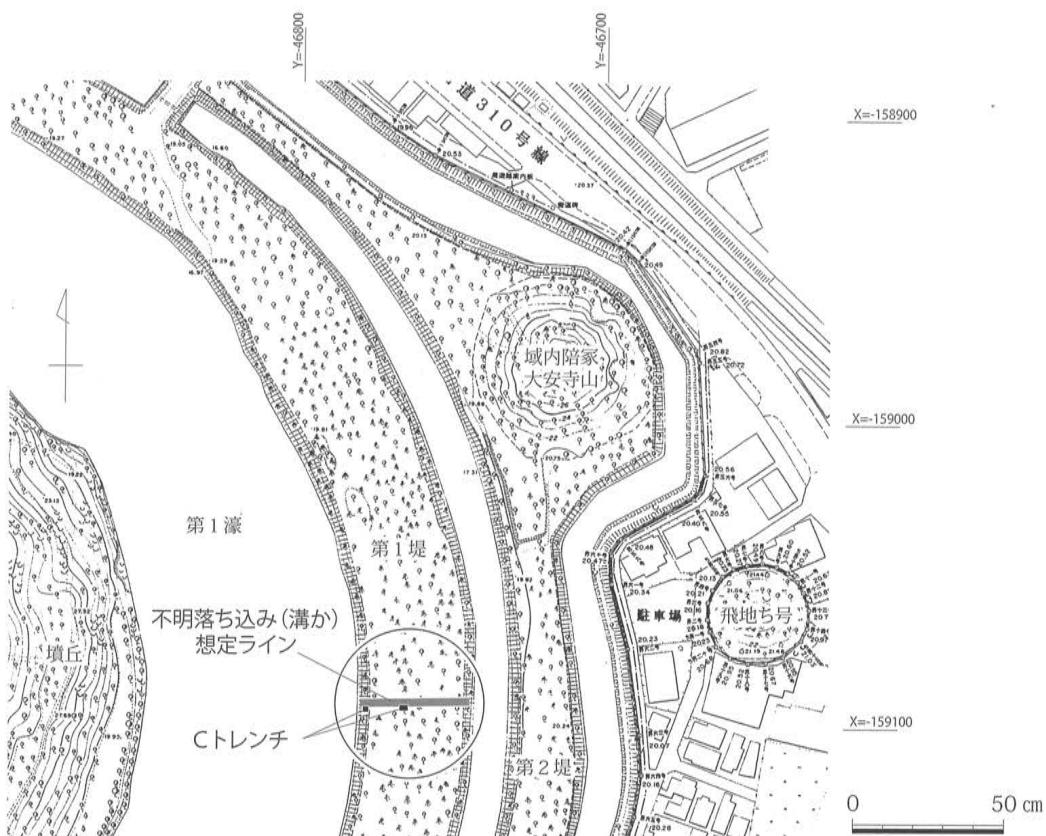


第19図 百舌鳥耳原中陵 Bトレント出土品実測図（2）（1/2）

18図1, 2、第19図10)と断面M字形のもの(第18図3、第19図11)がみられる。

外部調整は、底部(一段目)付近の破片(第19図13)にはタテハケのみがみられ、その他には1次調整タテハケの後、2次調整ヨコハケがほどこされる。とくに、右斜め上方向の静止痕がみられる個体(第18図4)は、途中で欠損しているため確定はできないものの、Bc種ヨコハケの範疇で解釈できると考えられる。

これらの埴輪には黒斑がみられず、全て窯窯焼成によるものである。色調は、黄褐色の個体(図版20-3, 6, 7, 8、図版21-10, 12)、灰褐色の個体(図版20-4、21-9, 11)、明赤褐色(図版20-2、21-13)、



第20図 百舌鳥耳原中陵 Cトレンチ位置図 (1/2,500)

暗赤褐色（図版20-1, 5）の個体にわけられる。

全体として、復元径、口縁部形態、突帯形態、色調に違いがみられることから、このトレンチ周辺には複数個体の円筒埴輪が並んでいたと考えられる。
(土屋隆史)

(3) Cトレンチ

後円部の東側に対面する第1堤上に設けたトレンチである。当初は、第1堤の中央付近に長さ3m×幅2mのトレンチを設定するのみであったが、その延長上の第1濠際に長さ2m×幅2mのトレンチを追加して設定した。ここでは、前者を第1堤中央付近トレンチとし、後者を第1濠側トレンチと呼称することとする。

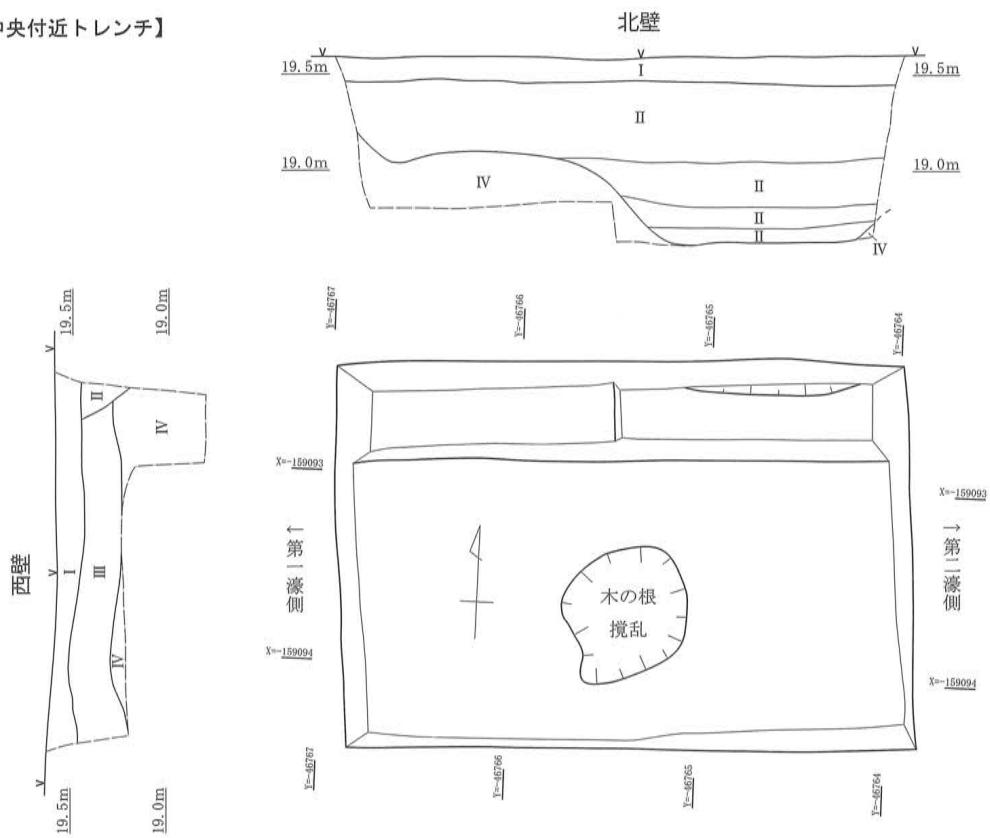
①第1堤中央付近トレンチ（第20～22図、図版18-1） 確認された土層は、上から表土（I）、不明落ち込み埋土（II）、流土（III）、地山（IV）である。II層は黄褐色砂質土を基調とし、IV層（地山）に由来すると思われる砂利や礫を含む。若干ではあるが、埴輪片も含まれており、古墳築造以降に形成された遺構であると判断した。III層（流土）は暗黄褐色砂質土であり、埴輪片を少し含む。IV層（地山）は灰白色砂質土で非常に堅緻であり、礫を多く含む。現在の地表面から40cm前後で地山となっている。

上述した不明落ち込みは、トレンチの北辺に沿ってその上端がかろうじて確認されたのみであり、その全貌や性格を把握することは困難である。ただし、当トレンチの北辺に沿って延び、さらに後述する第1濠側トレンチにおいてもトレンチ北辺に沿って同様の落ち込みが確認できることから、第1堤を横断するような落ち込みが存在していた可能性が高いと考える。

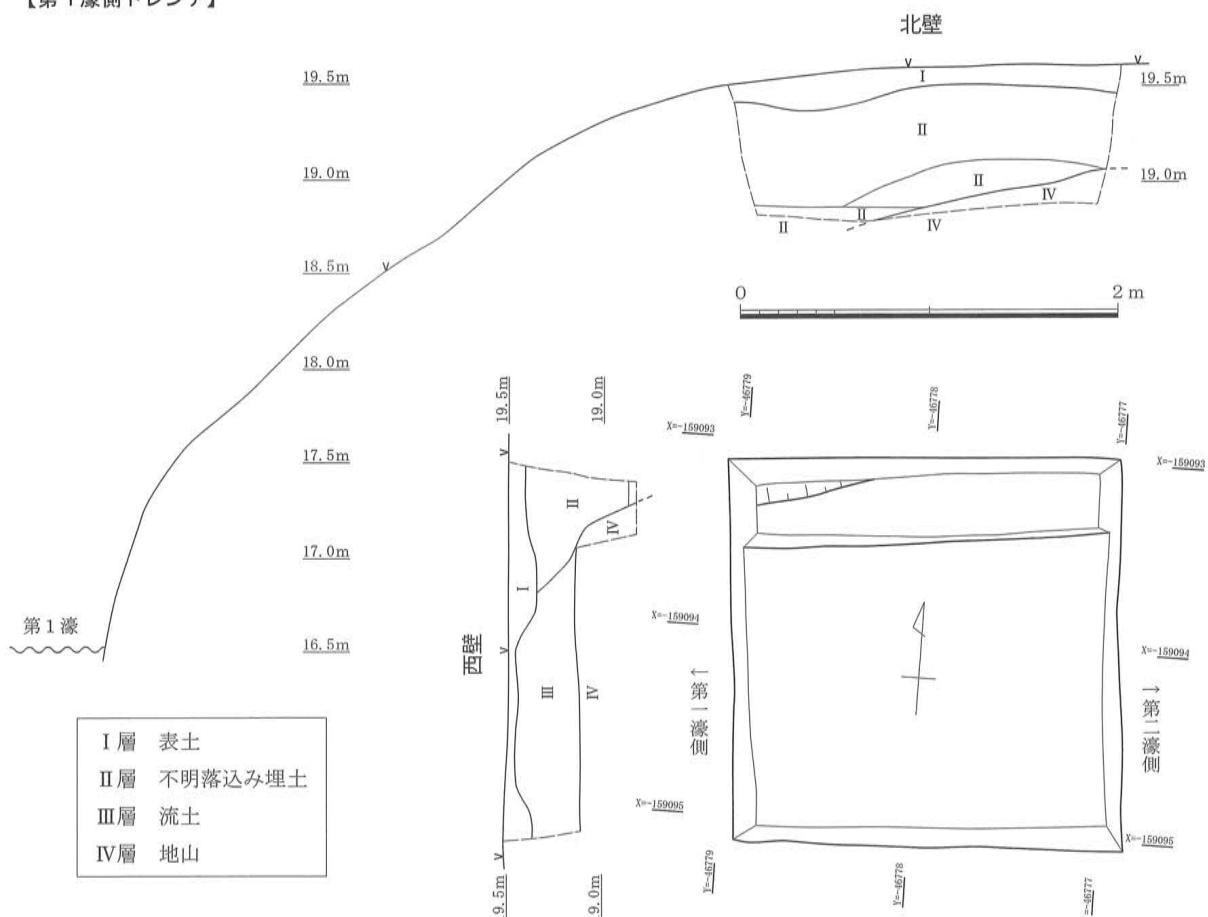
当トレンチでは、II層とIII層から埴輪片など10点が出土している。そのうち、特徴的なものを図示しておく（第22図）。1は貼付口縁とされる形状の円筒埴輪口縁部の破片である。当陵においては珍しい口縁部形態といえる。

②第1濠側トレンチ（第20～21図、図版18-2） 確認された土層は、上述した第1堤中央付近トレン

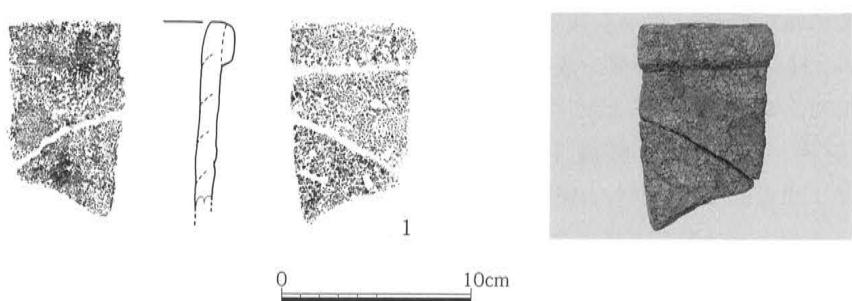
【第1堤中央付近トレンチ】



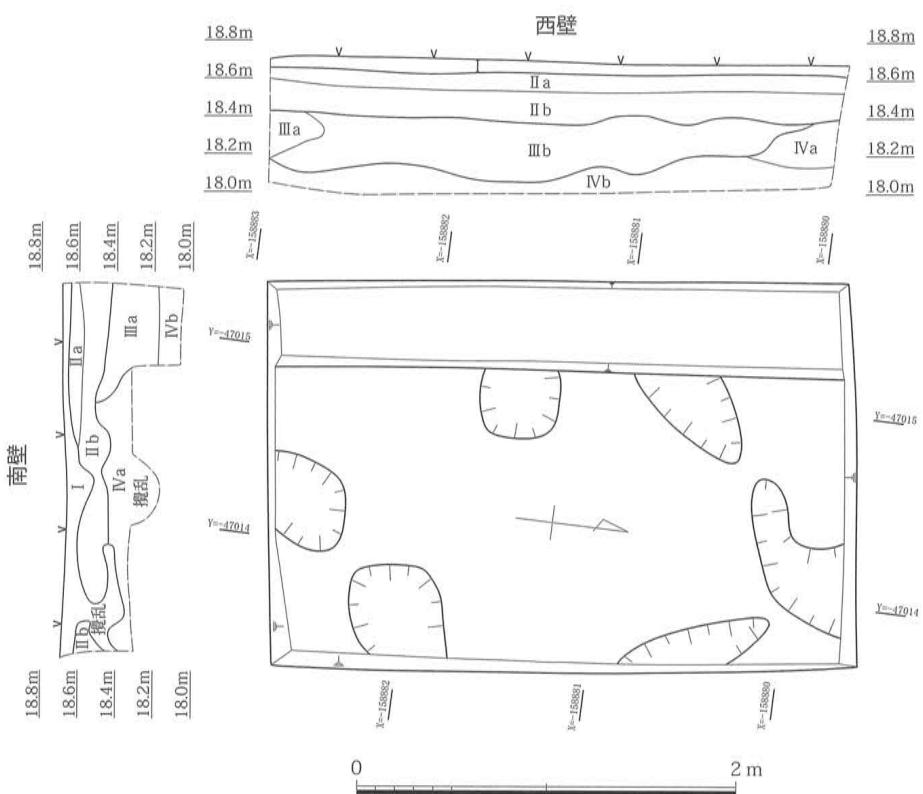
【第1濠側トレンチ】



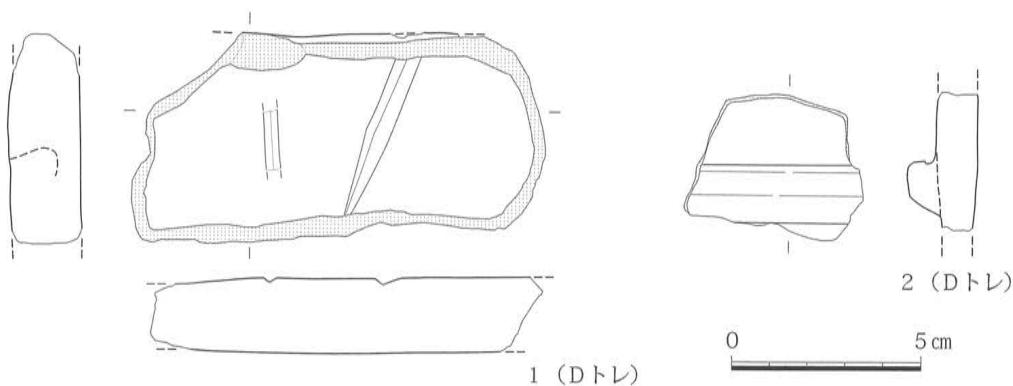
第21図 百舌鳥耳原中陵 Cトレンチ平面図および断面図 (1/40)



第22図 百舌鳥耳原中陵 Cトレンチ出土 円筒埴輪実測図 (1/4)



第23図 百舌鳥耳原中陵 Dトレンチ 平面図・断面図 (1/40)



第24図 百舌鳥耳原中陵 Dトレンチ出土品実測図 (1/2)

チと同様で、現在の地表面から 40 cm 前後で地山となっている。当トレンチでは、II 層から埴輪の微細片が 1 点出土したのみである。第 1 堤の第 1 濟際に円筒埴輪列が存在していたとすれば、検出されてもおかしくない位置に設定したトレンチではあるが、そのような存在をまったく感じさせない状況であった。（加藤）

（4）D トレンチ（第 23 図、図版 19）

本トレンチは第 1 堤の北西に位置し、第 1 号濠側に設けた。トレンチの大きさは、長さ 3 m × 幅 2 m である。調査の結果、地表下 30 cm 付近で地山を確認した。

表土（I）は厚さ 6 cm ほどであり、堆積土（II）は厚さ 20 cm ほどである。堆積土（II）は暗黄褐色を呈する IIa 層と、灰色と褐色が混じる IIb 層に区分できる。

地表下 30 cm 付近（標高 18.4 m）から、明黄褐色を呈し粘土ブロックを含む地山（IVa）と、灰色と褐色が混じった色を呈し礫を多く含む地山（IVb）がみられる。両層ともに西側で落ち込みがみられ、そこに堆積した暗黄褐色土（III）には埴輪片が含まれていた。この落ち込みが根攪乱によるものであるか、人工的なものであるかを確定することは難しい。III 層は、色調がやや明るい IIIa 層と、やや暗い IIIb 層に区分できる。

埴輪（第 24 図、図版 21-2） 堀輪片は 11 点出土した。その内、部位が推測できる個体を 2 点を図化した。これらは IIIa 層から出土したものである。どちらにも黒斑はみられず、窯窓焼成によるものである。第 24 図 1 は扁平な板状で、厚さは 2.0 cm である。表面には、幅 0.4 ~ 0.7 cm の線刻が 2 箇所で確認できる。形態的特徴と線刻からみて、蓋形埴輪の飾板か、家形埴輪の破片であると考えられるが、確定はできない。第 24 図 2 は、円筒埴輪の胴部の破片である。突帯は断面台形を呈している。表面は摩耗しており、外部調整は確認できない。

（土屋）

まとめ

今回実施した予備調査の調査面積は、当陵第 1 堤の広大な面積からすれば微々たるものであり、その結果を普遍化できるのかについては、慎重にならざるをえない。この点を踏まえ、今回の予備調査の所見を以下にまとめておく。

まず、当陵完成時の面と考えられる地山や盛土が、A ~ D のいずれの地点においても、現在の地表面から 20 ~ 40 cm ほど下で確認されており、非常に浅いことが確認できた。確認された当陵完成時の面の標高は、A トレンチで 19.0 m（盛土）、B トレンチで 19.7 m（地山）、C トレンチで 19.2 m（地山）、D トレンチで 18.4 m（地山）となっており、海側（墳丘からみて北西側）が低く、反対側（墳丘からみて南東側）が高い傾向にある。したがって、自然地形をおおむね反映した結果とみてよいであろう。

また、今回の調査状況からみて、墳丘上だけでなく第 1 堤上にも円筒埴輪列が存在していたものと考えられる。しかし、その存在を積極的に認めることができるのは、第 1 堤上面の第 2 濟際のみであり、現状では第 1 濟際ににおいてその痕跡を確認できていない⁽²⁾。第 1 堤の第 1 濟際ににおける円筒埴輪列については、①当初から存在していなかった、②点的に配置されていた、③存在していたが崩落してしまった、などの可能性が考えられるが、その当否については今後の調査の進展にゆだねたい。

これらの結果を踏まえつつ、当庁では今後、当陵第 1 堤における事前調査をすすめていく予定である。

（加藤・土屋）

註

（1） 戸原純一「仁徳天皇陵野犬防止柵設置箇所の調査」『書陵部紀要』第 26 号、宮内庁書陵部、1975 年。

（2） このことに関連して、梅原末治が後円部東側付近の第 1 堤の第 1 濟側において埴輪列がみられることを紹介している点が注意される。

梅原末治「応神・仁徳・履中三天皇陵の規模と營造」『書陵部紀要』第 5 号、宮内庁書陵部、1955 年。

平成 29 年度 墳丘外表面調査の成果報告—宇和奈辺陵墓参考地—

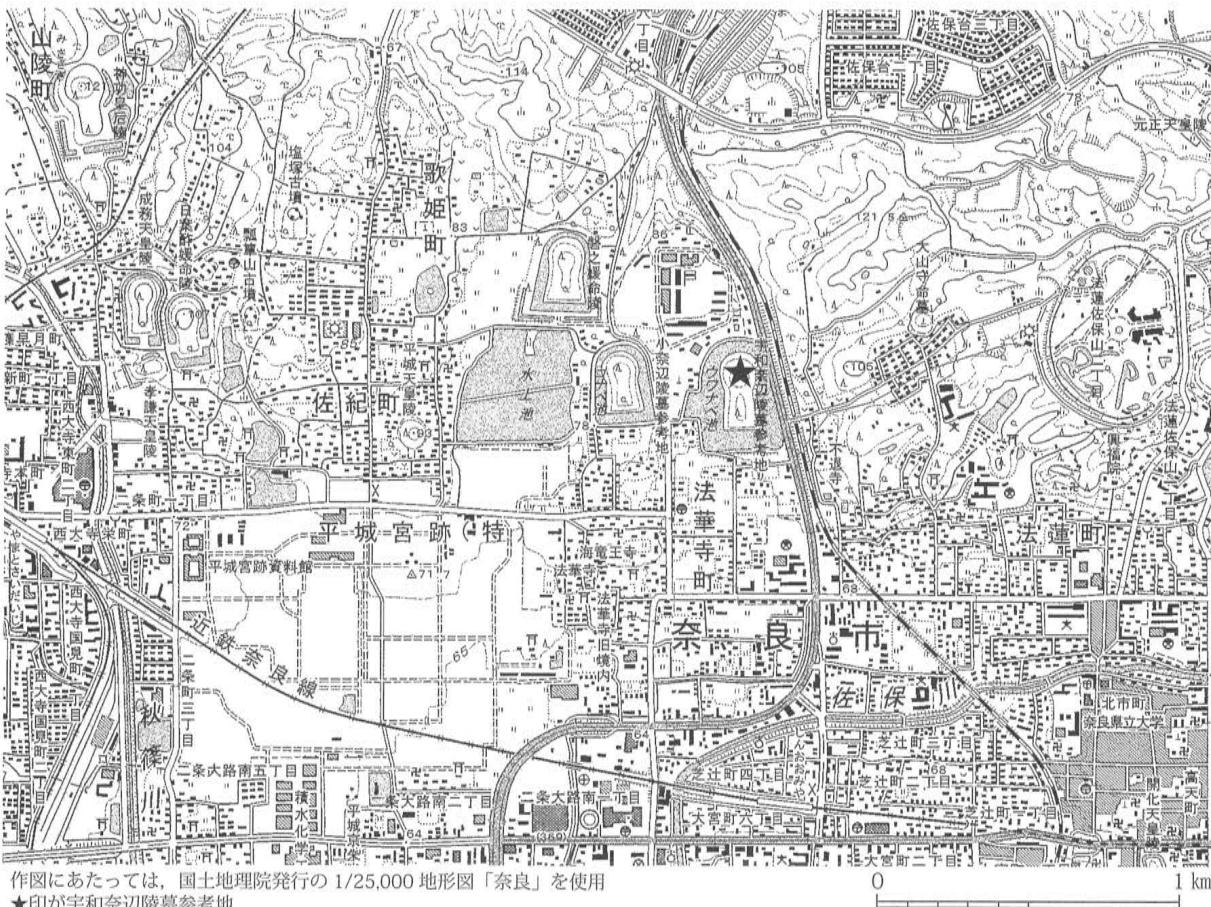
はじめに

陵墓において書陵部陵墓課が行う調査には、事前調査や立会調査など埋蔵文化財の確認を伴うものほかに、主に墳丘の精細な測量図を作成して現況を記録する墳丘外形調査などがある。いずれも、陵墓の保全・管理に必要なデータを取得するための考古学的調査である。その中でも、平成 28 年度に開始した墳丘外表面調査は踏査を中心としたものであるが、調査形態として当庁のみで実施するものではなく、陵墓の保全・管理をより強化するために、新たに地元自治体や外部研究者の協力を得ながら行うものである。初めての実施となったのは百舌鳥・古市古墳群内に所在する陵墓 3 箇所についてであり、その調査結果については、本誌第 69 号において報告を行ったところである。

平成 29 年度は、28 年度に引き続き墳丘を陵墓として宮内庁が管理を行い、周濠部分が自治体等の管理になる宇和奈辺陵墓参考地を調査対象とした（第 25 図）。同参考地は濠幅が広く、墳丘裾が絶えず周濠の波浪にさらされている状態にあるが、護岸工事が未実施であるためにその保全については喫緊の課題であり、将来的な工事の必要性からも墳丘外表面調査の目的と合致することから、対象として選定したものである。

以下に、本調査の成果について報告を行いたい。墳丘の所見のほか、採集した埴輪があるのでそれについても報告する。また、平成 25 年に濠水の波浪により前方部前面東隅が一部崩落した際に、埴輪と須恵器が転落したため採集していたものがある。これらについても、この機会にあわせて報告することとする。

なお、踏査による地表面の所見であるため、将来的に墳丘裾護岸工事に先立つ事前調査が実施された場合は、その結果しだいで所見が変更される可能性があることを付言しておきたい。
（清喜裕二）



第 25 図 宇和奈辺陵墓参考地 位置図 (1/25,000)

1 調査に至る経緯と調査の経過

(1) 調査に至る経緯

同参考地は、長さ約 260 m を測る 3 段築成の前方後円墳である。周囲を大規模な周濠が廻るが、墳丘部を陵墓地として当庁が管理しており、周濠部分は奈良市と地元水利組合等の共有地となっている。周濠は 2 重に廻ることが確認されており、これまでの調査によって外堤側についてはある程度のデータがあるが、墳丘については埴輪など遺物の採集が行われることはあったものの、具体的な考古学的情報に乏しい。さらに、本調査の目的である陵墓の保全・管理の強化という点からは、考古学的情報の収集に重点を置きつつも、墳丘に様々は影響を与えていたと考えられる林相についても現状を把握する必要があった。

上記のことを踏まえて、調査の実施にあたっては平成 29 年度に入り奈良県・奈良市と数回の協議を行い、準備を行った。調査への参加者は以下のとおりである。外部研究者は考古学研究者とともに森林生態学や造園学の研究者に参加いただき、地元自治体からは、埋蔵文化財担当の専門職員に参加いただいた。

(外部研究者)

公益財団法人大阪府文化財センター（考古学）	理事長 田辺征夫（奈良市文化財保護審議会会長）
京都府立大学文学部（考古学）	教授 豊田哲郎（奈良県文化財保護審議会委員）
大阪市立大学大学院理学研究科（森林生態学）	准教授 名波 哲
奈良県立大学地域創造学部（造園学）	准教授 井原 縁（奈良市文化財保護審議会委員）

(奈良県)

教育委員会事務局文化財保存課記念物・埋蔵文化財係	主査 北山峰生
県立橿原考古学研究所調査部調査課調査第 1 係	係長 米川仁一
同 上	調査第 2 係 係長 青柳泰介
同 上	研究員 前田俊雄

(奈良市)

教育委員会教育総務部文化財課埋蔵文化財調査センター	所長補佐 鐘方正樹
同 上	記念物係長 森下浩行
同 上	主査 池田裕英

(所属・肩書きは調査実施時のもの)

当庁は、陵墓課陵墓調査室の清喜裕二と加藤一郎が調査を担当した。また、調査の準備・実施にあたっては畠傍陵墓監区事務所から多大な協力を得た。

(2) 調査の経過

調査は、平成 30 年 11 月 12 日（日）～14 日（火）までの 3 日間で行った。各日の内容は以下のとおりである。

11 月 12 日（日）晴れ 清喜・加藤現地入り。明日の調査に備えて、平成 21 年度小奈辺陵墓参考地事前調査の際に周濠の周囲道路に設置した 3 級基準点から、宇和奈辺陵墓参考地内にレベル移動を行った。合わせて、墳丘内に設置されている探求標等の所在確認を行った。

11 月 13 日（月）晴れ 外部研究者と地元自治体職員の参加を得て、宇和奈辺陵墓参考地の墳丘外表面調査を実施。午前中に、ボートを使用して濠側から墳丘の現状、特に墳丘裾の状況を観察。午後に、墳丘内を踏査。踏査終了後、奈良市埋蔵文化財調査センター講座室を会場に、調査結果の検討会議を行う。

11 月 14 日（火）雨 あいにくの雨天であったが、地元自治体からの調査参加者の協力を得て、墳丘第 1 段テラス面のレベル確認を行い、その後に後円部西側の第 1 段テラス面付近を中心に断面図を作成した（第 29 図）。また、最後に第 30・31 図に掲載した埴輪の採集を行い、調査を終了した。

なお、調査の準備段階では天候に恵まれていたこともあり、濠水の利用による水位の低下で墳丘裾の観察ができるところまで落水が進んでいた。しかし、直前の台風や降雨等の影響による増水で調査時点では裾が水没してしまったため、別の機会に写真撮影などを行った。

（清喜）

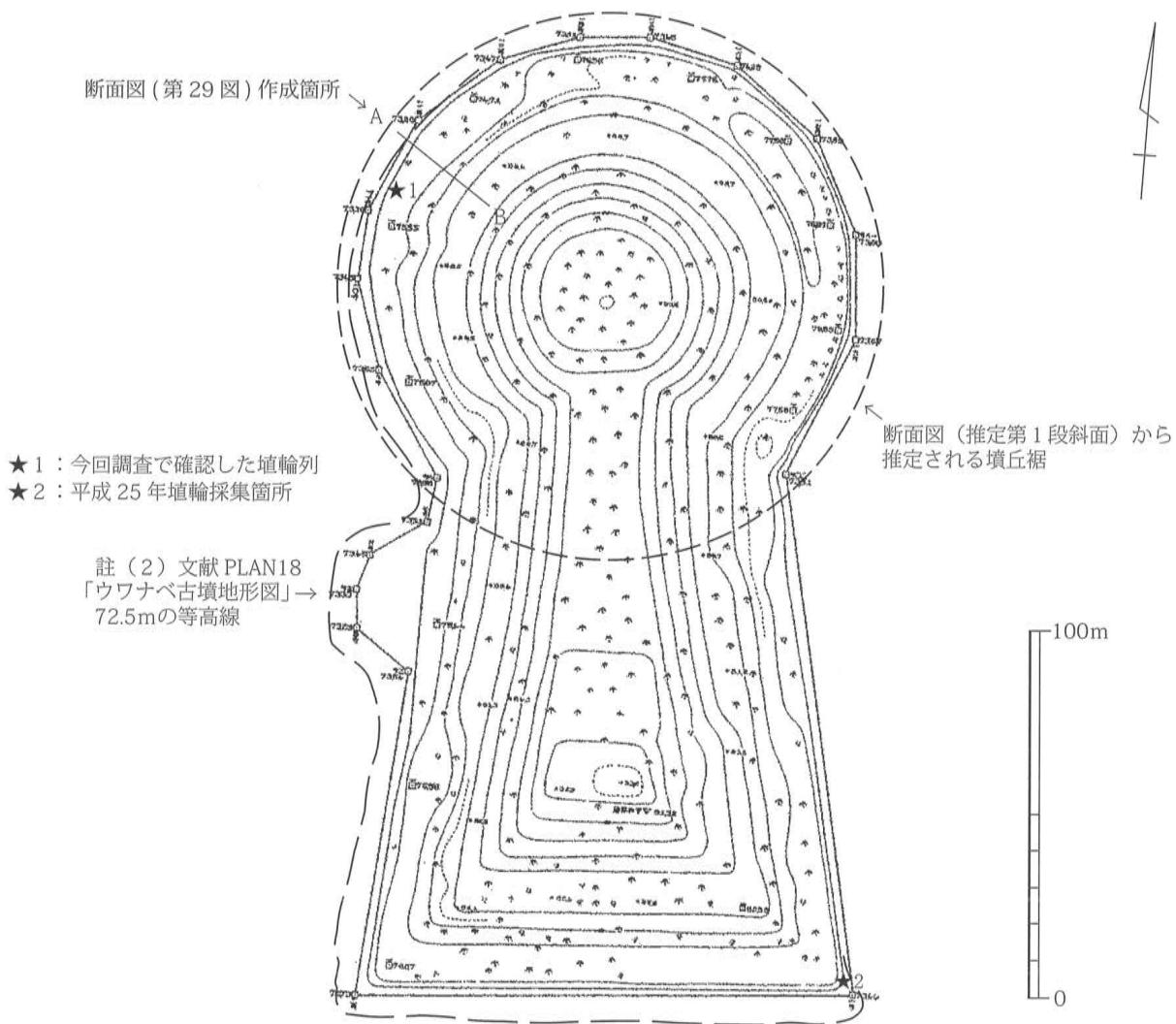
2 調査の所見

踏査は、調査のために後円部に設置した仮設橋を利用して墳丘に入り、等高線の変化や遺構・遺物の状況などに注意しながら反時計回りに第1段テラス面上を中心に観察を行った。必要に応じて墳丘上部についても観察を行い、遺構・遺物と林相の状況を確認した（図版22）。

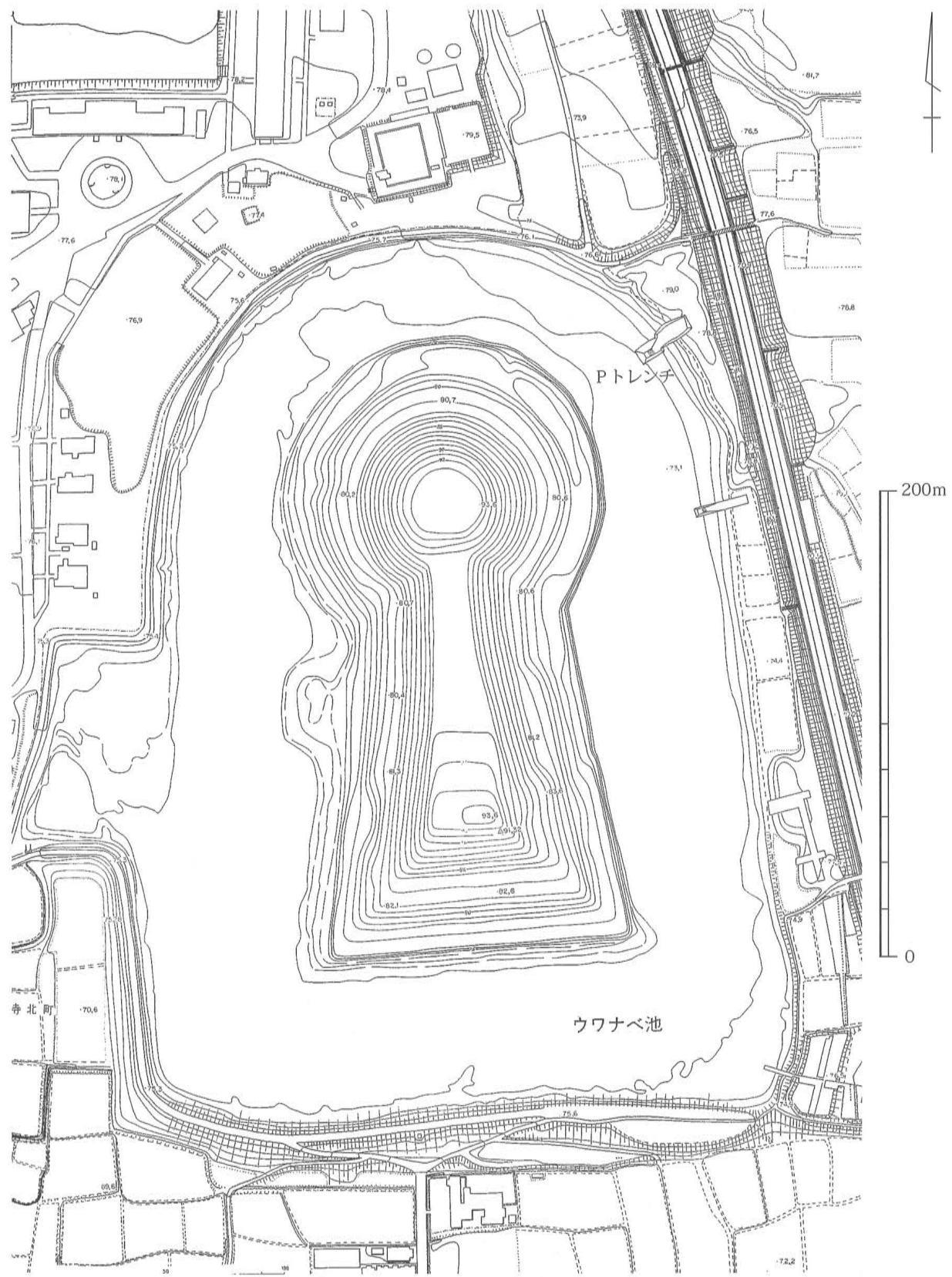
(1) 墳丘の状況

本参考地の墳丘には、2種類の測量図がある⁽¹⁾。ひとつが帝室林野局作成の陵墓地形図（大正15年測量、昭和2年製図）である（第26図）。測量年次が古く、外堤部分を含めてより築造時に近い様相が記録されるが、等高線は2m間隔であり細部地形の読み取りが難しい。もうひとつが奈良国立文化財研究所（以下、奈文研）により作成された地形図である（第27図）⁽²⁾。等高線間隔は1mとなっており、陵墓地形図と比較して地形の判読を行いやすくなっているほか、造出についても等高線が入っている。また、白石太一郎氏により周濠の検討が行われて、断面模式図が示されている（第28図）⁽³⁾。

後円部 第1段テラス面は、陵墓地形図作成時点では既に高低差が認められる。後円部の東半分の範囲と主軸の西側約20m付近までは、77m付近に平坦面が認められる。この高い平坦面は後円部の西半分については徐々に高さを減じて、第26図に示した断面図作成箇所や埴輪列確認箇所付近においては、標高約75mできれいに高さが揃う。標高77m付近と75m付近の平坦面は、観察の結果からは明らかに様相が異なる。濠際で埴輪列が認められることからも、本来の平坦面が75m付近にあることは明らかである。77m付近の平



第26図 宇和奈辺陵墓参考地 陵墓地形図 (1/2,000)



第27図 宇和奈辺陵墓参考地 測量図 (1/2,500)
[出典] 註(2)文献PLAN18「ウワナベ古墳地形図」を引用(一部改変)

坦面は凹凸や不規則な斜面などが認められることから、後世の人為的な盛土によって形成されたと考えられる。

先述のとおり、後円部では、北西部において墳丘裾から第2段テラス面付近までの断面図を作成した。現地の観察から、一部流土の堆積が認められるものの第1段テラス面、第2段斜面、同テラス面は良好な状態を維持している。埴輪列は、現状では濠際の墳丘裾がえぐれた場所に、やや落ち込んだような状態で数個体が確認できた。現状は墳丘裾であるが、陵墓地形図に位置を落とすと墳丘の内側にあたることから、陵墓地形図作成後に濠水の波浪の影響により墳丘裾が削られた結果と考えられる。付近一帯では埴輪片が多く認められており、後述する埴輪も同じ範囲で採集したものである（第26図★1、第29図）。

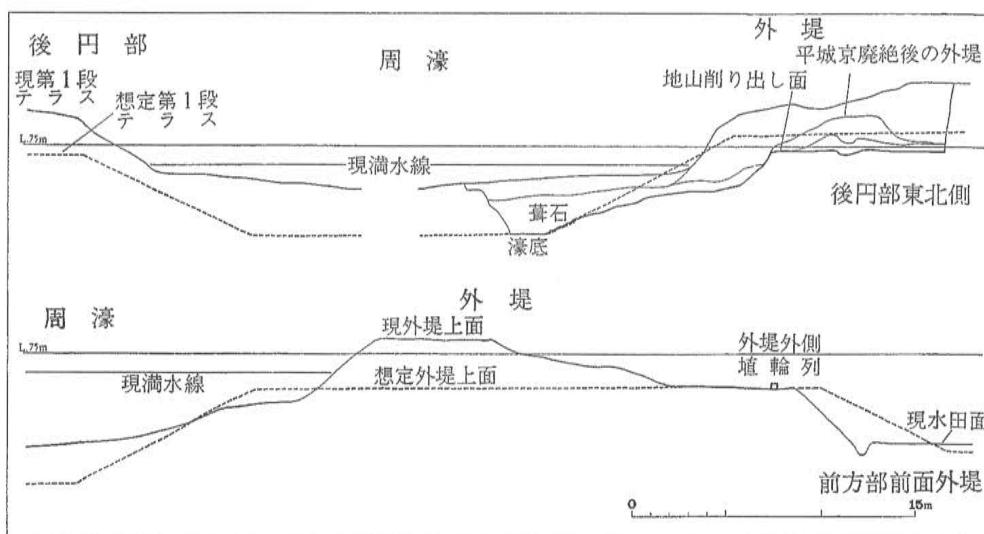
後円部頂上平坦面は、中央付近にわずかな高まりが認められるものの、現状からどのような性格のものかは判断しがたい。2段目、3段目についてはおおむね良好な状態を保っているといえる。

造出 調査時には完全に水没した状況であった。1969年に実施された外堤ほか周辺の調査の際には、境界線の外側で土師器・須恵器・土製品が採集されたことが知られている。奈文研作成の測量図から読み取る限り、造出上面は最高点が73.5m～74mの間にあり、72.5mのラインが平面形をよく表している（第26図）。あわせて現在は明瞭な造出上面が認められず、周濠に向かって緩やかに下っていく状況である。後円部第1段テラス面の高さが約75mであることから、推定される造出上面との比高は1m前後であったと考えられる。

前方部 前方部は、現地観察の結果では、西側面において第1段テラス面の幅がかなり減じていることが確認された。また、第2段斜面の流土の影響により、平坦面を明瞭に観察できる場所は限られている状況であった。東側面は比較的良好な状態であることから、後円部第1段テラス面（約75m）との比高を確認した。前方部東側面南端で確認されている埴輪列で約76.5mの数値が得られたので、比高は約1.5mとなる。第1段テラス面は、前方部に向かって徐々に上がっていく構造になっていると考えられる。2段目・3段目については、陵墓地形図に示された等高線のとおり数ヶ所流土が認められるが、全体としては良好な状態にあると考えられる。また、鞍部において、埴輪列の可能性がある埴輪片の散布地を1ヶ所確認した。

第29図で推定される後円部の裾を第26図に示した。奈文研作成測量図での造出からくびれ部付近の濠内等高線の形状と比較的整合しているように見えるが、第1段斜面の角度が推定である点、第1段テラス面濠側の傾斜変換点が陵墓地形図作成時点の位置であるという点から、あくまで参考程度にとどまるものと理解いただきたい。

なお、陵墓地形図では要所に高さが記入されているが、後円部頂上平坦面と前方部頂上平坦面では、ほぼ同じ高さであることが示されている。



第28図 宇和奈辺陵墓参考地（ウワナベ古墳）周濠（後円部東北側・前方部前面）断面模式図（1/400）
[出典] 註(3)文献 第7図から転載

(2) 林相の状況

本参考地の林相が、築造後どのように形成されたかは不明である。いずれにしても築造当初は、葺石や埴輪列が施された築山であったことから、当然古来より周辺にあった植生とは形成過程が異なるであろう。さらに、途中で人の手が入る機会も多かったと考えられるため、その履歴はそれなりに複雑であることが推測される。現在辿るのは、大正 15 年に陵墓地形図作成のために測量された時の林相からであり、記号の分布からは大半がマツで占められている。そのほかに闊葉樹（広葉樹）の記号が散在する。マツはアカマツと考えられ、本参考地の航空写真などからも確認できるが、時期を経るにつれて徐々に減少している様子が見て取れる。以下は、現地観察を行った際に樹林関係の研究者からいただいた所見を、調査担当者が整理・記述したものである。

林相の特徴 樹種としては、アラカシ、シャシャンボ、カナメモチ、ソヨゴ、サカキなどの常緑広葉樹が目に付くものとして確認された。林の状態としては若い植生となっている。周辺には道路を挟んで里山が広がっておりコナラを中心の林が広がるが、本参考地はその段階を通り越していく、常緑のカシなどが中心となる常緑広葉樹林に置き変わっていることから、林相の移り変わりの段階としては、ほとんど最終段階に近いと考えられる。常緑樹の中でもソヨゴは若いところによくみられる樹種であり、最終段階の一歩手前の状態にあると考えられる。いったん過去の林がなくなった後、現在の林がスタートしているので、種数としては多くはなく、20 種類には届いていない。これからは、墳丘の中がうっそうとした暗い状態となり、暗いところでもアラカシ、サカキは芽生えて、耐えて生き抜く樹種であるので、大きな台風などによる破壊がない限り、この状態の継続が予測される。

また、土壌はふかふかで柔らかくスポンジのような状態である。腐葉土の層が形成されていると考えられ、周辺の森林では 10cm 程度下で粘土・砂・礫の層が出てくるが、本参考地では 20cm 以上の厚みがあると考えられる。水分をよく吸収する性質をもつ。

管理上の視点 腐葉土の表面に樹木の細根が張り巡らされていて、腐葉土が流れないように握っている状態にあると考えられる。もし樹木がなくなって根も枯れてしまうと、柔らかい腐葉土は雨水などで流されやすくなる。一方で、樹木の根が地中の遺構に影響を及ぼすことは考えられる。樹種によって、深くまで入り込むもの、表層でとどまるものと違いがあるが、本参考地に生えている樹種は、地下の遺構や遺物に到達する可能性があるので、樹種による伐採の選別をしてもそれほどの効果は期待できないと考えられる。

大きいものを切れば表層の土壌が流れ出すおそれがあるので、大きい樹木を少しづつ切って、残った小さい樹木の細根を張り巡らせて集団で土を握っている状態を維持させながら管理する方法が考えられる。

現在確認できる樹木は、カシもサカキも大きくなると、現在の 2 倍程度まで成長する。樹種構成は変わらないが、まだまだ大きくなり、大きくなると根も深くなる。

裾周りの樹木に関しては、かつてのアカマツ林の痕跡といえるマツが残り、太陽の光を求めて 2 ~ 3 本斜めに伸びている状況にある。また、マツだけでなくいずれの木も、太陽のある濠の方に斜めに幹が伸びている。墳丘の中は密閉状態となっているため樹木は光を求めており、枝張りも外側に集中している状態にある。裾にある樹木は、濠の方に押されて比重がかかっている状態にあるため、濠水の影響で下がえぐられると、樹木とともに根が抱え込んでいる部分の土が塊で崩れて落ちることになる。管理上樹木の伐採を行うときには、内側を日当たりの良い状態にするか、裾の傾斜を整えるような措置が必要と考えられる。

本参考地一帯は風致地区であるが、風景になじんでいる状態にある。林相としては最終段階の一歩手前の状態であるので比較的安定していると考えられるが、その中に混じっているスギとヒノキが弱っており、それらが枯れて後々倒れる可能性がある。倒れると根元の土も持ち上がる考え方のため、現在の状況の中で、一定のレベルの大きさのものにマークしておくと同時に、スギ、ヒノキを筆頭に弱っている樹木をリストアップして処置をしておいた方が安全と考えられる。段階的に処置をする中で残った樹木は育っていくが、現在生えている樹木の年齢に差はないので、大きくなりやすい樹木は重点的に処置していくことで将来的に倒木の危険を減らせる可能性がある。

（清喜）



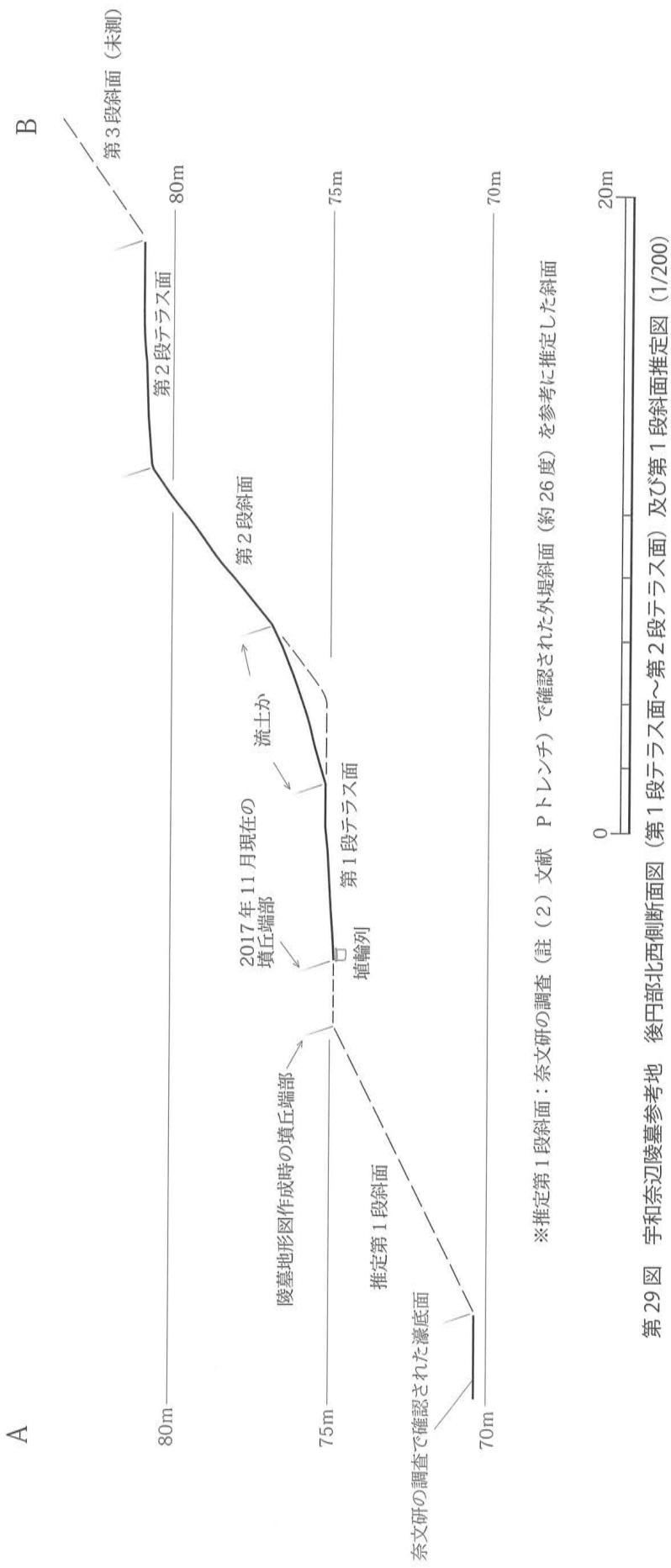
後円部北西側第1段テラス面
実測の状況



後円部第1段テラス面 調査の状況

A

B



※推定第1段斜面：奈文研の調査（註（2）文献 Pトレンチ）で確認された外堤斜面（約26度）を参考に推定した斜面

第29図 宇和奈辺陵墓参考地 後円部北西側断面図（第1段テラス面～第2段テラス面）及び第1段斜面推定図（1/200）

3 採集遺物

(1) 本調査での採集品

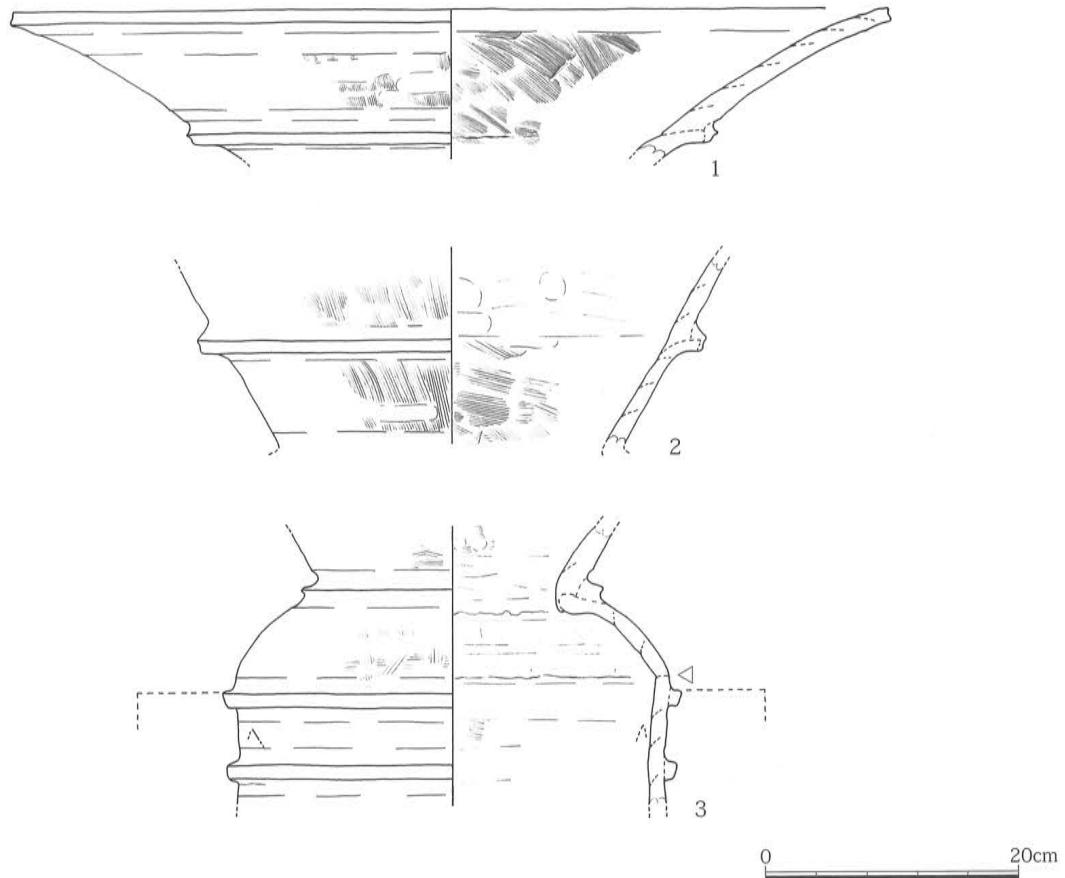
埴輪 今回の調査で採集された埴輪片は計 30 点であるが、接合したものや接合しないものの同一個体と認定できる破片も多く、ここで報告するのは 6 点である（第 30・31 図）。そのうち、1～3 は朝顔形埴輪となることが確実な資料である。また、4・5 は口縁部の破片であり、円筒埴輪となることが確実といえる（図版 23-2）。6 は底部の破片であり、円筒埴輪もしくは朝顔形埴輪となる可能性がある。

今回採集された資料の焼成方法は、いずれの破片にも黒斑がみられないことから、窯窓による焼成であったと判断される。焼成の仕上がりは、非常に堅緻なものもあれば（1・2 など）、軟質なものもみられる（4・6 など）。なお、赤色顔料の塗布と焼成の先後関係について判然としない資料が多いものの、3 については焼成前に塗布していることが確実といえる（図版 23-1）。

胎土は、いずれの資料も大きな差異はみられず、やや密であり、直径 5 mm 以内のチャートや白色砂粒などを含んでいる。色調は黄白色から黄橙色のものが多い。

以上が、今回の採集品の全体的な傾向であり、以下では個別の資料について特徴を記しておきたい。

すでに述べたように、1～3 は朝顔形埴輪である。1 は二次口縁部を含む破片で、口径は復元で 70 cm であった。2 は一次口縁部から二次口縁部にかけての破片である。1・2 とともに、一次口縁部を通常の口縁部のように形成したのちに、二次口縁部を積み上げ、一次口縁部と二次口縁部の境界に突帯を貼付していることが断面の観察からわかる。



第 30 図 宇和奈辺陵墓参考地 採集品実測図 (1) 朝顔形埴輪 (1/6)

3は鰭付朝顔形埴輪であることが判明した資料である。同様の資料は以前にも本誌で紹介したことがある⁽⁴⁾。円筒部上段から頸部にかけての破片で、円筒部の最上段における突帯間隔が、通常の突帯間隔にくらべて狭くなるいわゆる極狭口縁の形態を反映したものであることがわかる。この間隔の狭くなる段には、小さな三角形の透孔が複数穿たれていたことを確認できる。

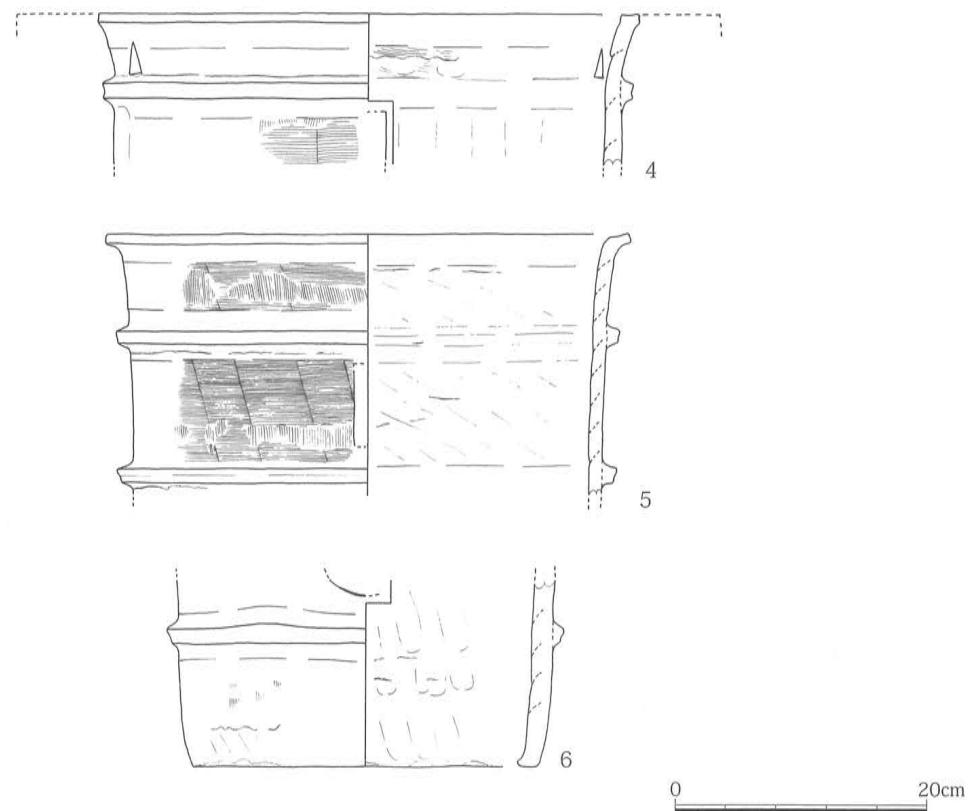
4は円筒埴輪の口縁部を含む破片で、鰭が付属していたことを確認できる。口径は復元で43cmであり、口縁部高は5.5cmである。最上段には小さな三角形の透孔が穿たれている。その下の段には長方形の透孔を穿っていたことが、同一個体と考えられる接合しない破片から推測される。この段の外面調整には、静止痕をともなうヨコハケがみられるものの、段の全体が残存しているわけではないため、ヨコハケの種類を確定するにはいたらない。

5は円筒埴輪の口縁部を含む破片であるが、鰭が付属するかどうかは不明である。口径は復元で41.5cm、口縁部高は7.5cm、突帯間隔は約11cmである。最上段の下段には長方形の透孔がみられる。外面の最終調整は、やや傾いているもののBc種の範疇で理解されるヨコハケといえる。内面調整はナデを基本としている。4・5のいずれも、最上段の口縁部高が突帯間隔よりも狭くなる極狭口縁といわれる形状となっている（図版23-2）。

6は底部を含む破片であり、底径は27.5cm、第1段高は11cmである。器壁の表面は摩滅がいちじるしいものの、第1段の外面にはわずかにタテハケが確認できる。内面調整はナデを基本とし、第2段には円形もしくは半円形の透孔が穿たれている。

以上、ここまで述べてきたように、今回の採集品の特徴はこれまでに知られている当参考地出土埴輪の様相をおおむね逸脱しないものといえる。

なお、今回あらたに気づいた点としては、朝顔形埴輪の割合が多い点をあげることができる。似たような傾向は、百舌鳥陵墓参考地や五十瓊敷入彦命宇度墓などにおいても確認できる点が注意される。何らかの指標となる可能性がある。（加藤一郎）



第31図 宇和奈辺陵墓参考地 採集品実測図(2) 円筒埴輪(1/6)

(2) 平成 25 年度の採集品

平成 25 年 11 月に採集されたもので、位置は前方部東側の屈曲部である。南北に並ぶことから前方部第 1 段テラス面の東側面の埴輪列の南端部あたると考えられる。採集されたのは埴輪と須恵器である。いずれも転落した状況で採集されたため、特に須恵器が埴輪の中に入れられていたのかなど、配列状態の詳細は不明である。以下に各資料の概要を述べる。

埴輪（第 32 図、図版 24～25-1）朝顔形埴輪や形象埴輪と考えられる破片は認められず、基本的には円筒埴輪の破片で占められると判断できる。破片を整理した結果、4 個体分になると考えられる。底部が完存するものが 1 個体あるほか、残り 3 個体は接合しないものもあるが、いずれも底部の破片を含んでいる。また、各個体とも胎土は密で、径 1 mm 程度の砂粒を含むほか、大きいものは径 5 mm 程度のものも散見される。

7（第 32 図 7、図版 24-1・2）は、底部復元径 30.8 cm を測る。鰐付の個体である。胴部と底部は接合しないが、調整痕等の観察から同一個体である可能性が高いと判断した。外面は、タテハケの後 B 種ヨコハケが施されている。静止痕の間隔は 3～4 cm である。内面は、底部において左斜めに傾いたタテハケが顕著である。胴部ではタテハケの後指ナデによる調整が行われている。底部から第 1 段突帯直下までの高さは 8 cm である。透孔については不明である。色調は明黄橙色から黄白色を呈しており、胴部の破片には赤色顔料の塗布が認められる。

8（第 32 図 8、図版 24-3・4・7）は、胴部復元径 31 cm を測る。鰐付の個体であるかどうかは不明であるが、胴部突帯に接して縦方向に近接する 2 本のヘラ状工具による刻みが認められることから、鰐付の個体である可能性が考えられる。胴部と底部は接合しないが、調整痕等の観察から同一個体である可能性が高いと判断した。外面は、タテハケの後 B 種ヨコハケが施されているようだが、静止痕は不明瞭である。内面は、底部において左斜めに傾いたタテハケが顕著である。胴部ではタテハケの後指ナデによる調整が行われており、7 の個体に類似する。底部から第 1 段突帯までの間隔は不明である。円形透孔が確認できる。色調は黄白色である。赤色顔料の塗布が認められる。なお、胴部には布の圧痕、底面には棒状の圧痕が認められる。

9（第 32 図 9、図版 24-5・6）は、現存高 16.8 cm、底部復元径 33.6 cm を測る。鰐付の個体であるかどうかは不明である。外面は、タテハケの後 B 種ヨコハケが施されている。静止痕の間隔は 3～4.5 cm である。内面は、左斜め上に向かっての指ナデである。底部から第 1 段突帯直下までの高さは 13 cm である。透孔は不明である。色調は黄白色を呈しており、同一個体と考えられる胴部の破片には赤色顔料の塗布が認められる。

10（第 32 図 10、図版 24-8・25-1）は、現存高 24.7 cm で底部が完存しており、底部径は 25 cm を測る。鰐付の個体であるかどうかは不明である。外面は、タテハケの後 B 種ヨコハケが施されている。静止痕の間隔は 3～4 cm である。内面は、左斜め上に向かっての指ナデである。底部から第 1 段突帯直下までの高さは 10.5 cm である。対向する 2 ヶ所に円形透孔が確認できる。色調は黄白色である。残存範囲で赤色顔料の塗布は認められない。なお、底面には棒状の圧痕が認められる。

須恵器（第 32 図 11、図版 25-2～4）無蓋高壺である。脚下半部の 2/3 を欠くが、全形を知りうる資料である。高さ 9.2 cm、口縁部径 10.8 cm、脚端部復元径 9.1 cm を測る。色調は、焼成前に塗布されたと考えられる赤色顔料により、暗赤褐色を呈する。脚部内面も壺底部付近以外のほぼ全面に施されている。赤色顔料に覆われていない脚部内側の壺底部外面は、黄橙色を呈する。胎土は密である。

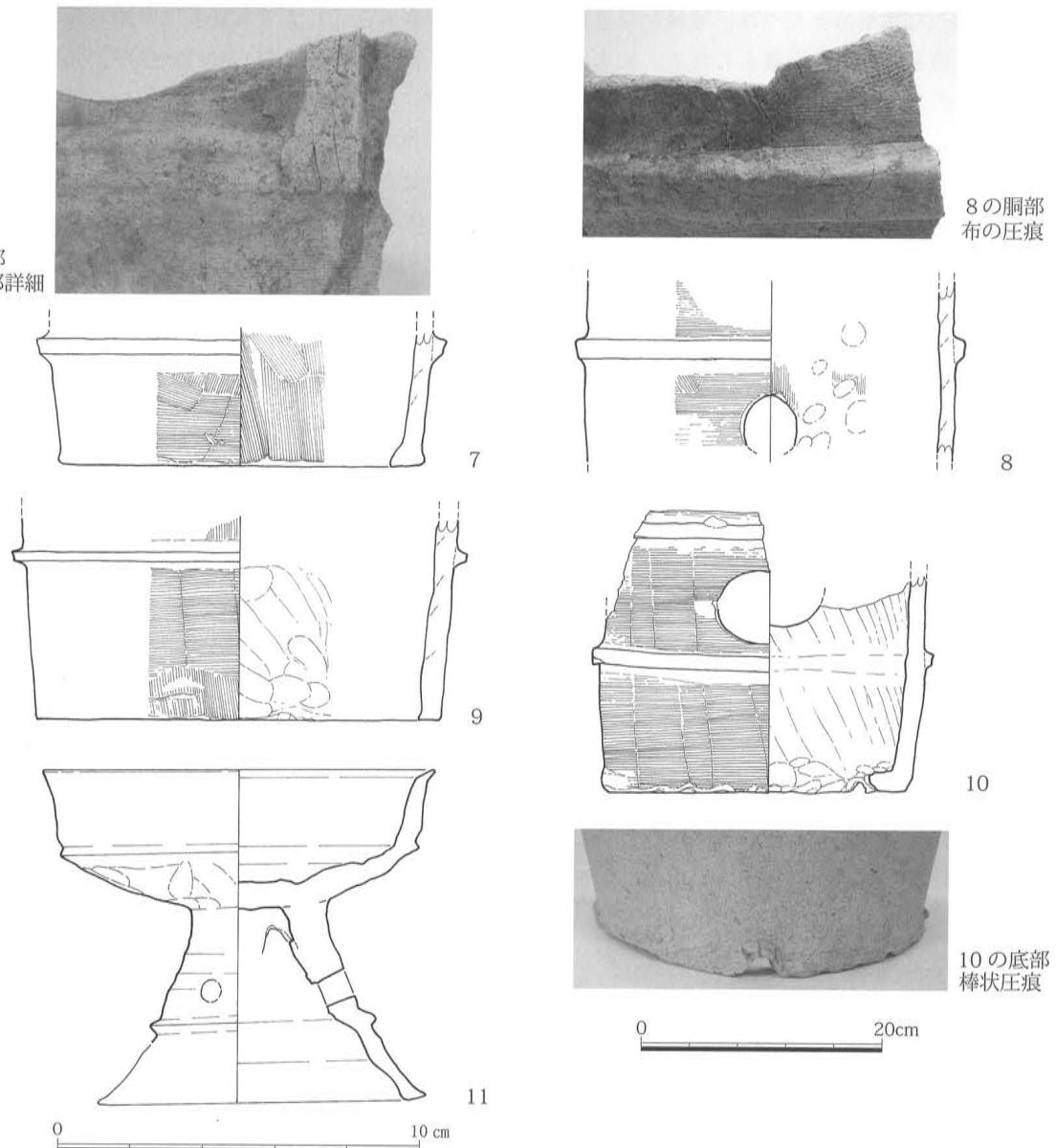
調整は、底部外面に回転指ナデが一部残るが、不定の指ナデ調整と思われる痕跡が顕著で、押圧痕やヘラケズリと考えられる痕跡も認められる。その他は回転指ナデ調整である。

壺部は、底部外面に調整痕の影響でやや凹凸が目立つ。立ち上がりへの屈曲部には明瞭な突帯と沈線が形成されている。立ち上がりは直線的だが、端部でわずかに外反する。内面は、粘土帶の痕跡が顕著である。

脚部には、貫通する直径 6～9 mm の円形透孔が 3 ヶ所に施されている。透孔の下には突帯が廻る。脚部全体としては緩やかに外反している。

採集された須恵器高壺は、全体として従来本参考地において知られていた須恵器と同様の特徴をもつといえよう⁽⁵⁾。

（清喜）



第32図 宇和奈辺陵墓参考地 採集品実測図（3）円筒埴輪（1/6）・須恵器（1/2）

まとめ

本参考地における外表面調査の結果、墳丘上部については陵墓地形図作成時点と比較して、大きく変わることとはなかったといえる。しかし、墳丘裾については、濠水の波浪の影響により一定幅の後退が認められ、これは埴輪列が所々で確認されたことや埴輪片の散布などに端的に表れているといえよう。今回の知見では、埴輪列が具体的にテラス面のどの辺りに位置するかという点までは明らかにできなかったが、将来的に調査を実施する際に参考となる情報といえる。

後円部第1段テラス面において大規模な盛土がなされていると考えられる点については、これまでの陵墓の調査でしばしば同様の盛土が確認されている。多くは濠内堆積土が浚渫土として墳丘上に盛り上げられたものであった。後円部の北側が濠内堆積土のもっとも厚い場所のひとつであることから、その可能性が高いと考えられるが、現在は推測の域をでない。盛土の時期を推定できるような採集品もないが、本来のテラス面がパックされた状態にあると考えられるため、遺構の状態などは第1段テラス面の中では良好であると考えられる。

今回報告した採集品としては、埴輪と須恵器がある。いずれも、これまで本参考地で知られていた資料の特徴と同様のものであると考えられる。須恵器については、脚部の一部を欠くものの全形が捉えられる資料である点で、これまで破片資料が中心であったものに新たな知見を加えるものとなった。

林相については、周辺地域と比較して樹種の少ないことが指摘された。樹林としては比較的安定している一方で、スギ・ヒノキについては弱っているものが見られたことから、他の大きく育つ樹種も含めて注意深く経過観察を行う必要がある。また、表面の腐葉土の厚いことが指摘されたが、葺石などの遺構を保護している側面があり、樹林の管理はこれらを維持することとも連動していることから、そのことも踏まえて適切に管理していく必要がある。

近年は、規模の大きな台風などにより、日本列島各地域に大きな自然災害の及ぶ事例が増える傾向にある。今回の調査結果は、本参考地における今後の考古学的な調査計画の検討のほか、保全・管理など自然災害への対応を考える上で重要な情報であり、今後も必要に応じて蓄積していく必要があろう。（清喜・加藤）

註

- (1) 二つの測量図を同縮尺に合わせて重ねると、多少大きさ（長さ）が異なるようである。作成年代の違いもあるため、何らかの理由によるのであろう。後円部については重なり具合が良好であるため、主に前方部前面付近のズレが顕著となっている。
- よって、第 26 図では第 27 図の等高線を一部重ねているが、後円部を重ね合わせた状態での位置になるため、上述のとおり、前方部前面付近の位置関係はズレが大きくなっている点に注意が必要である。
- (2) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告 VI 一平城京左京一条三坊の調査一』（奈良国立文化財研究所学報第 23 冊）、1974 年。
- (3) 白石太一郎「古墳の周濠」『角田文衛博士古稀記念 古代学叢論』、角田文衛先生古稀記念事業会、1983 年。
- (4) 土生田純之・清喜裕二・加藤一郎「宇和奈辺陵墓参考地採集の埴輪について」『書陵部紀要』第 57 号、宮内庁書陵部、2006 年。
- (5) 註 (2) 文献に同じ。